

Tattvasaṃgraha および *Tattvasaṃgrahapañjikā*
第 21 章「三時の考察 (Traikālyaparīkṣā)」
校訂テキストと和訳 (kk. 1809–1855)

志賀 浄邦

I. はじめに

本稿は、シャーンタラクシタによる *Tattvasaṃgraha* (以下 TS と略) とカマラシーラによる注釈 *Tattvasaṃgrahapañjikā* (以下 TSP と略) 第 21 章「三時の考察 (Traikālyaparīkṣā)」後半部 (kk. 1809–1855) のテキストおよび翻訳研究であり、前半部の『校訂テキストと和訳 (kk. 1785–1808)』(=志賀 [2015b]) に接続するものである。テキスト校訂および翻訳の方針、TS/TSP「三時の考察」章全体の参考文献・略号等については志賀 [2015b] を参照されたいが、本稿で新たに使用する参考文献・略号については、本稿末尾に挙げている⁽¹⁾。

TS および TSP「三時の考察」章のうち、今回校訂・訳出する箇所的主要なテーマあるいはトピックは大きく分けて、(a) 説一切有部による作用説とそれに対する批判 (TS 1809–1819)、(b) 過去・未来の存在と効果的作用あるいは効果的作用能力 (arthakriyāśakti)⁽²⁾ の関係性 (TS

⁽¹⁾ 志賀 [2015b] の脱稿後、2016 年 3 月に秋本勝氏 (京都女子大学) による著書『仏教実在論の研究 —三世実有説論争— (上)』(=秋本 [2016]) が出版された。同書は、TS および TSP『三時の考察』章のテキスト校訂および翻訳研究を含んでいるため、結果的に志賀 [2015b] および本稿とは大きく内容が重複することとなった。秋本氏とは、TS/TSP 同章に関して共著の可能性についても協議したが、諸般の事情により、最終的に両者がそれぞれ別々に校訂テキストと翻訳を発表することとなった。別々に発表することになった経緯と理由は、秋本 [2016: 3f.] に言及されている通りである。一方、志賀 [2015b: 158, n.1] でも述べた通り、秋本氏からは、本テキストを読解した集中研究会の折にテキストの読みや翻訳について多くの有益なコメントをいただいた。ここに改めて感謝の意を表したい。以上のような経緯と事情から、テキスト校訂・翻訳に関して秋本 [2016] と本稿では理解が一致している場合がほとんどであるが、細部において両者の意見が異なる場合がある。志賀 [2015b] の執筆段階では秋本 [2016] を参照することができなかったが、本稿では、秋本 [2016](= A) と読みや解釈のちがひがある場合、できる限り注記するよう努めた。

⁽²⁾ arthakriyāśakti の訳は、ダルマキールティが用いるテクニカル・タームとしての用例を考慮すれば、「効果的作

1820–1841), (c) TS1787–1789 において提出された三世実有論の五つの論拠それぞれに対する批判 (TS 1842–1855) の三つである。以下にそれぞれの概要と問題点, また注目に値する点をまとめておきたい。

(a) に関しては, まず, サンガバドラによる〈作用 (kārita)〉の定義「結果を引き寄せる能力 (phalākṣepaśakti)⁽³⁾」と実在との関係が論じられる。今回本稿が扱う箇所の冒頭に位置する TS 1809 に先立つ TS 1806–1808 において, シャーンタラクシタとカマラシーラは, サンガバドラが主張する〈作用〉を「世俗レベルの [存在] (TS 1806d: sāṃvṛta)», 「構想されたもの (TS 1807a: kalpita)», 「真に実在するもの (TS 1808b: bhāvika)」でないもの, 「仮に立てられた存在 (TSP 622,12)」であるとして一旦否定している。これはサンガバドラが, 〈作用〉を存在要素 (dharma) と同一のものでも異なるものでもない, いわば相続 (saṃtāna) のようなものであると述べた (TSP 621,11–15) ためである⁽⁴⁾。

しかしながら TS 1809 以降, シャーンタラクシタとカマラシーラは, 〈作用〉=〈結果を引き寄せる能力〉を, 言葉の対象とはならない実在 (vastu) あるいは独自相 (svalakṣaṇa) と見なし, 過去および未来のものがそのような能力を有することを排斥する方へ方向転換を行う。事実カマラシーラは, 「そして, 〈結果を引き寄せる能力〉とは, 実在の独自相とは別ものではなく, それそのものに他ならない。 (TSP 622,17f.)」と注釈している他, 「燃やすことや料理すること等の結果 (kārya) をなすもの (TS 1810b)」を「燃やすことや料理すること等の効果的作用 (arthakriyā) をなすもの (TSP 622,21f.)」などと注釈していることから, むしろ進んで kārita = phalākṣepaśakti = vastu(svalakṣaṇa) = arthakriyāśakti という等式を容認しているように見える。これについては, シャーンタラクシタおよびカマラシーラが意図的に, サンガバドラの主張する〈結果を引き寄せる能力〉を効果的作用能力 (arthakriyāśakti) と同一視することによって, 説一切有部を自らの理論体系に引き込み, 論争を有利に展開しようとしたと考えることもできるだろう⁽⁵⁾。いずれにせよ, TS 1809 以降で展開される議論は, 秋本 [2002] が夙に「ヴァスバンドゥの問いに促されて生まれたサンガバドラの引果力はダルマキールティの因果効力へつながり, そのつながりをシャーンタラクシタが自著において明らかにした」と結論づけている通り⁽⁶⁾, 効果的作用能力に関する, 特に仏教内部における思想史を考える上で看過することのできない記述を含んでいる。

その後, 説一切有部の主張は, 未だ作用がないこと (未来)・現に作用していること (現在)・

用能力」より「目的実現能力」あるいは「因果効力」の方が適切であると考えられるが, 説一切有部が主張する作用 (kārita) との関連性・連続性を重視して, 本稿では「効果的作用能力」という訳語を採用することとする。ダルマキールティが構築した arthakriyā に関する理論については, 桂 [2002], 稲見 [2012] を, また説一切有部 (サンガバドラ) の作用説との関係については, Halbfass[1997], 秋本 [2002] などを参照のこと。

(3) サンガバドラによる作用の定義については, 志賀 [2015b: 173,5–9; 193] を参照のこと。

(4) 議論の詳細については, 志賀 [2015a: 160 with n.51] を参照のこと。

(5) Cf. 秋本 [2002: 31–34].

(6) 秋本 [2002: 33f.] 参照。

作用がなくなること(過去)といった互いに相反する複数の属性が、有部によればその本性を保ったまま三世にわたって存続するとされる同一の實在に帰属することはありえないという理由により、排斥されることとなる。(TS 1810–1812) この批判に対して有部は、「境位を喪失したり獲得したりすることから、實在は三世において区別され、諸々の境位は存在(bhāva)自体と区別されない。(TS 1813–1814)」と応酬するものの、諸々の境位が實在と同じものである場合、境位が實在と同様に常に存在するか、あるいは實在が境位と同様に三世において変化するかかいずれかになることになり、説一切有部の定説との矛盾をきたすことが指摘される。(TS 1815)

(b)では、過去・未来の存在における効果的作用能力と瞬間性(kṣaṇikatva)の有無が検討されるが、この箇所の冒頭の TS 1820 が「勝義的な存在」を「効果的作用能力をもつもの」と定義する PV 1.166 をベースとし、その一部をアレンジしたものとなっていることから、(b)における一連の議論がダルマキールティの立場に立脚して行われていることがわかる。アビダルマの体系に従えば、物質的存在等(五蘊)を生み出すのは、因果的存在の四つの特徴(有為の四相)のうちの一つである<生起(jāti)>という特徴であるとされるが、<生起>という特徴が「生み出すもの(janika)」と呼ばれる以上、例えば物質的存在(色, rūpa)を生み出す際にそれ以前にはなかった何らかの特性(viśeṣa, atīśaya)を付与するはずである。シャーントラクシタは、そのような物質的存在と特性が異なるか異ならないかという選言支を設定し、そのいずれの場合にも不都合が生じることを指摘する。(TS 1823–1827)

さらに TS 1830 以降においては、過去・未来の存在が瞬間的なもの(kṣaṇika)かそうでないのか、という選言支が立てられる。過去・未来の存在が瞬間的なものであるとすると、例えば過去・未来のある時点において生じる瞬間が現在となり、生じた後に消滅する瞬間が過去となり、これから生じる瞬間が未来となることになるため、過去・未来のある時点における存在は無限定の複数の時(例えば、過去のある時点が現在時にも未来時にもなる)をもつことになる。一方、過去・未来の存在が瞬間的なものではないとすると、全ての仏教徒にとって定説であるはずの刹那滅論との矛盾や、それを支える論理(刹那滅論証)との矛盾が生じることになる。以上から過去・未来の存在が瞬間的なものである場合も瞬間的なものでない場合も何らかの不都合に陥ることが示されたことになる。

また TS 1834 以降では、過去・未来の存在が効果的作用能力をもつか否かが検討される。まず効果的作用能力をもつ場合について議論がなされるが、ここで注目すべきは、シャーントラクシタおよびカマラシーラが対論者である説一切有部を過去・未来の存在が現在のものとなってしまうという不都合に導くため、帰謬論証(prasaṅga)と帰謬還元論証(prasaṅgaviparyaya)を用いている点である。以下にカマラシーラが構成する二つの推論式を見ておきたい。

- **推論式 (1)** [遍充関係:] およそ効果的作用能力をもつものは現在のものである。ちょうど、目下議論の主題とはされていない諸々の現在のもののように。[主題所属性:] そし

て、[説一切有部の主張に従えば] 過去のもの等は効果的作用能力をもつ。[結論: 過去のもの等は現在のものであることになるが、それは不合理である。] 以上は同一性の証因による帰謬 [論証] である。(TSP 627,22f.)

- 推論式 (2) [遍充関係:] [およそ] 現在のものでないものは、いかなる [作用] に対する能力ももたない。ちょうど空中に [咲く] 蓮華のように。[主題所属性:] そして、過去のもの等は現在のものではない。[結論: 過去のもの等は、いかなる [作用] に対する能力ももたない。] 以上は能遍の非認識 [による帰謬還元論証] である。(TSP 628,12-14)

志賀 [2015a: 162] でも指摘した通り、上記の推論式 (1) と (2) の遍充関係は換質换位の関係になっており、推論式 (2) は帰謬還元論証に相当する。ここで見られる帰謬論証と帰謬還元論証は刹那滅論証において行われるものと論理形式が同じであり、帰謬論証に同一性の証因 (svabhāvahetu) が、帰謬還元論証に能遍の非認識 (vyāpakānupalabdhi) が用いられている点も共通している⁽⁷⁾。例えば TBh 等に見られる刹那滅論において展開される帰謬還元論証 (Kajiyama[1998: 114f., n.309]) の結論: 「この壺は現在において、過去・未来の時点に属する結果を生み出さない」と、推論式 (2) の結論: 「過去のもの等は、いかなる [作用・結果の生起] に対しても効果的作用能力をもたない」を比較すると、論証の主題や観点は異なるものの、「現在の一瞬間にあるもののみが効果的作用をなす (効果的作用能力をもつ)」という点で二つの論証の目指すところが一致していることがわかる。また刹那滅論証の帰謬還元論証の方は、三条件を満たした証因 (喩例の提出が可能な外遍充) による論証を可能にするために定式化されたという側面が強いと考えられるが、三世実有論批判の方は対論者 (説一切有部) の主張を論駁すると同時に、「過去・未来のものは効果的作用能力をもたない。(故に、過去・未来のものは存在しない。)」という過去・未来の存在を否定する論証を確立するために用いられたと考えられる。いずれにせよ、シャーンタラクシタ・カマラシーラ師弟が、有部の三世実有論批判に際して帰謬論証と帰謬還元論証を効果的に活用していることがわかる。仏教論理学、特に刹那滅論および恒常性批判に関わる論証の形式の変遷・発展を考察しようとする場合、この過去・未来の存在を批判する論証もヴァリエーションの一つとして考慮に入れておく必要があるだろう。

なお、過去・未来のものが実体として存在する場合その結果もまた常に存在することになるため、天界への到達や解脱の達成に向けた個人の努力が無益となるという見解が提示される。(TS 1840) AKBh においてこの議論は、三世実有論の論拠の一つ (理証) として有部側から提出される「過去の業の果報が存在することから、過去世に属するものは実在する」という主張に対する批判部分でなされおり、そのテキストの一部が TSP においてもそのまま二次的に利用されている。なお、AKBh における並行箇所において、天界・解脱を目指す努力が無益になることは言及されない他、TS/TSP において前述の論拠が批判される箇所では逆にこの議論は現

⁽⁷⁾ Cf. 御牧 [1984: 214ff.], Kajiyama[1998: 114ff.].

れない。和訳に対する注解の中でも触れたが、TS/TSP が YBh の内容を暗に前提としている可能性がある。YBh の関連箇所でも、解脱という語や未来に現れるはずの果報の問題が言及されている。また、三世実有論を証明する論拠として、AKBh では言及されない「過去・未来のものを知るヨーガ行者の認識」が TS/TSP で挙げられ批判されていることも、このことを支持する。YBh と TS/TSP の関係性については別の機会に論じたい。一方、過去時・未来時に属するものが効果的作用をもたない場合は、空中に咲く華のように非存在となるとされ、簡潔に処理されている。(TS 1841)

(c) では、TS 1787–1789 において説一切有部によって提示された三世実有論を証明する五つの論拠 (1) 過去・未来のものを対象として生じる認識の存在、2) 「認識は二つのもの (=眼と色かたち等) に縁って生起する」というブツダの言葉、3) 過去の業から生じる結果の存在、4) 過去・未来のものに関するヨーガ行者の認識の存在、5) 「過去・未来の物質的存在等の全てを集めた後に [それらを] 色蘊と名づける」というブツダの言葉) に関して、逐一批判が行われる。基本的には AKBh でなされた議論を踏襲したものとなっているが、章全体の最後に、TS/TSP で新たに現れる 4) のヨーガ行者の認識の存在によって、過去・未来のものの存在を証明することの是非が議論される。(TS 1852–1855) この箇所においてシャーンタラクシタとカマラシーラは、ヨーガ行者の認識に関して独自の見解を提示している。すなわち、彼らはヨーガ行者による過去・未来の存在の認識の存在自体を正面から否定はせず、部分的には認めつつも、説一切有部とは別のソリューションを探っている。なお、この箇所のヨーガ行者の認識に関する記述は、TS/TSP 最終章「超感覚的な対象を見る方の考察 (Atīndriyārthadarśiparīkṣā)」において再度言及され、論じられている。シャーンタラクシタとカマラシーラが、概念知としてのヨーガ行者一般の認識と完全な無分別智である如来の認識を明確に区別している点は注目に値する。

本稿で校訂・訳出する箇所の概要は以上の通りであるが、志賀 [2015b] と同様、本稿でもテキスト校訂と翻訳の作業を通じて、AKBh の注釈書 (例えば AKBhṬ, AKVy など) や引用文献 (例えば『勝義空性経』など)、議論の前提となる文献 (例えば YBh など) 等、TS/TSP 「三時の考察」章と他のテキスト群との関係性を探ることも視野に入れたい。

II. 翻訳にあたって

(a) テキスト校訂および訳出の際の基本方針 (追加分)

- テキスト校訂の際には、J の読みを優先するものの、AKBh や AKBhṬ, TSP の別の章等に見られる並行箇所や引用されているテキストの読みも考慮した上で最終的な判断を行う。
- 秋本 [2016] (=A) が採用する読みあるいは解釈との異同がある場合、適宜テキストあるいは訳の脚注においてそれを示す。

(b) 今回訳出する箇所各資料の位置

- TS 1809–1855
 - (Skt.) J91b5–94a3; Pā33b11–34b7; K510,17–519,14 (kk. 1810–1856); S622,1–632,8 (kk. 1809–1855); A318,14–333,15 (kk. 1809–1855)
 - (Tib.) D4266, vol. 18, ze 66a5–67b7; P5764, vol. 138, 'e 80a3–82a2
- TSP ad TS 1809–1855
 - (Skt.) J194a2–196a7; Pā148b12–151a3; K510,15–25; S622,15–13; A318,12–334,8
 - (Tib.) D4267, vol. 19, 'e 85a3–90a3; P5765, vol. 139, ye 120a4–125b2

(c) TS/TSP 第 21 章「三時の考察」(kk. 1785–1855) シノプシス**1. 三世実有論とその論拠 (TS 1785–1789)⁽⁸⁾**

- 1.1. 総論・他学派説との類似性の指摘 (TS 1785)
- 1.2. 四大論師の主張の紹介 (TSP 614,7–615,7 ad TS 1786)
 - 1.2.1. ダルマトラータ説 (bhāvānyathāvādin, 様態のちがいを主張する者)
 - 1.2.2. ゴーシャカ説 (lakṣaṇānyathāvādin, 特徴のちがいを主張する者)
 - 1.2.3. ヴァスミトラ説 (avasthānyathāvādin, 境位のちがいを主張する者)
 - 1.2.4. ブッダデーヴァ説 (anyathānyathikavādin, 関係性によるちがいを主張する者)
- 1.3. 四大論師の各主張に対する総論的批判 (TSP 615,8–23 ad TS 1786)
- 1.4. 三世実有論の 5 つの論拠 (TS 1787–1789)
 - 1.4.1. 理証 (1): 過去・未来の対象から生じる認識の存在にもとづく過去・未来世の存在証明 (TS 1787)
 - 1.4.2. 経証 (1): 「認識は二つもの (=眼と色かたち等) に縁って生起する。」 (TS 1787)
 - 1.4.3. 理証 (2): 過去の業から生じる結果の存在にもとづく過去世の存在証明 (TS 1788)
 - 1.4.4. 理証 (3): ヨーガ行者の認識による過去・未来世の存在証明 (TS 1788)
 - 1.4.5. 経証 (2): 「過去・未来の物質的存在等の全てを集めた後に<色蘊>と名づける。」 (TS 1789)
2. 説一切有部による作用説とそれに対する批判 (TS 1790–1819)
 - 2.1. 説一切有部およびサンガバドラによる作用 (kāritra) の定義 (TS 1790–1792)

⁽⁸⁾ TS 1785–1808 のシノプシスについては、すでに志賀 [2015b: 163f.] においても示したが、今回扱う箇所には三世実有論の五つの論拠 (TS 1787–1789) に対する批判部分も含まれているため、読者の参照の便宜のため、一部を再録しシノプシス全体を提示することとする。本稿において、校訂・訳出する箇所は、2.6. 以降 (TS 1809–1855) ということになる。

2.2. 作用と存在要素の関係について: 経量部の立場からの批判 (TS 1793–1800)

2.2.1. 作用が存在要素と異なる場合 (TS 1793–1797)

2.2.2. 作用が存在要素と異なる場合 (TS 1798–1800)

2.3. 作用の第三の可能性に対する批判と作用の作用の否定 (TS 1801–1802)

2.4. 「存在要素の本性は作用によって区別される」という主張とそれに対する批判 (TS 1803–1805)

2.5. 作用と存在要素の本性の関係性についての批判 (TS 1806–1808)

2.6. 仮に立てられた存在 (prajñaptisat) としての作用に対する批判 (TS 1809–1814)

2.6.1. 実在としての作用=結果を引き寄せる能力 (TS 1809)

2.6.2. 同一の存在に異なる三つの性質が帰属することはありえないことの指摘 (TS 1810–1812)

2.6.3. 説一切有部による反論: 諸々の境位と存在 (bhāva) の不異性 (TS 1813–1814)

2.7. 三世における実在 (vastu) とその境位 (avasthā) (TS 1815–1819)

2.7.1. 諸々の境位が実在と異なることの不可能性 (TS 1815)

2.7.2. 現在の存在とそれ自身の固有の性質が、過去・未来の境位にあるものと同一か異なるかの検討 (TS 1816–1819)

3. 存在 (実在) と効果的作用 (TS 1820–1841)

3.1. 効果的作用のない存在はありえないことを証明する二つの議論 (TS 1820–1827)

3.1.1. 実在の定義 (TS 1820)

3.1.2. 過去の事物が現在のものであることになる不都合の指摘 (TS 1821–1822)

3.1.3. 生起等の因果的存在の特徴と生起という特徴が生み出す特性 (atiśaya) が同一か異なるかの検討 (TS 1823–1827)

3.2. 過去と未来の諸存在の作用と瞬間性 (kṣaṇikatva) (TS 1828–1833)

3.2.1. 生起等の特徴が過去・未来に作用をなす場合に生じる誤りの指摘 (TS 1828–1829)

3.2.2. 過去・未来の存在が瞬間的なものであるかどうかの検討 (TS 1830–1831)

3.2.3. 過去・未来の存在が瞬間的なものではない場合、説一切有部自身の教義との矛盾の指摘 (TS 1832)

3.2.4. 過去・未来のものが実在することの、論理による排斥 (TS 1833)

3.3. 過去・未来の諸存在における効果的作用の有無 (TS 1834–1841)

3.3.1. 効果的作用をなしうる場合 (TS 1834–40)

3.3.1.1. 過去・未来が現在となる不都合の指摘 (TS 1834–1839)

3.3.1.2. 解脱への努力が無益となる不都合の指摘 (TS 1840)

3.3.2. 効果的作用をなしえない場合 (TS 1841)

4. 三世実在論の五つの論拠に対する批判 (TS 1842–1855)

4.1. 説一切有部によって立てられた主張命題 (TS 1789) における証因の誤りの指摘 (TS 1842–1844)

- 4.2. 【1.3.5. 経証 (2)】に対する批判 (TS 1845)
- 4.3. 【1.3.2. 経証 (1)】に対する批判 (TS 1846)
- 4.4. 【1.3.1. 認識の存在による理証】に対する批判 (TS 1847–1848)
- 4.5. 【1.3.3. 過去の業の存在による理証】に対する批判 (TS 1849–1851)
- 4.6. 【1.3.4. ヨーガ行者の智による理証】に対する批判とヨーガ行者と如来の認識および教説のちがひ (TS 1852–1855)

III. Critical Edition (TSP ad TS 1809–1855)

(K510,15; S622,15; J194a2; Pā148b12; D85a3; P120a4) athāpi⁽⁹⁾ syāt: bhavatu kārītraṃ prajñaptisat, tatḥ ca ko doṣa ity āha: **kārītrākhyeti.**

(Pā33b11; D66a5; P80a2)

**kārītrākhyā phalākṣepaśaktir yāśabdagocaraḥ⁽¹⁰⁾ /
śakter eva ca vastutvāt sā prajñaptisatī katham // (TS 1809)**

J194a3 **phalākṣepaśaktir** hi dharmāṅgāṃ kārītraṃ iti bhavatā⁽¹¹⁾ varṇitam. **yā⁽¹²⁾** ca ***phalākṣepaśaktiḥ** sā⁽¹³⁾ nānyā vastusvalakṣaṇāt⁽¹⁴⁾, kiṃ tarhi, tad eva. ata evāsau na **śabda-gocaraḥ⁽¹⁵⁾**, asādhāraṇatvāt svalakṣaṇe śabdāpravṛtteḥ. tatas ca **śaktir eva vastu** nānyad iti **katham sā śaktiḥ⁽¹⁶⁾ prajñaptisatī⁽¹⁷⁾** bhavet, naiva bhaved iti yāvat⁽¹⁸⁾. tatas ca tadvasād adhva-
vyavasthānaṃ tāttvikam eveṣṭaṃ bhavatīti⁽¹⁹⁾ bhāvaḥ. (TSP ad TS 1809)

(Pā33b12; D66a5; P80a3)

J91b6 **yac ceda-*m iḥsyate⁽²⁰⁾ rūpaṃ dāhapākādikāryakṛt /
atītānāgatāvasthaṃ kiṃ tad evābhyupeyate // (TS 1810)**

J92a1 **tad eva cet katham nāma tasyaivaikā-*tmanaḥ sataḥ /
akriyā ca kriyā cāpi kriyāvīratir ity api // (TS 1811)
ekasmin nirviśiṣṭe 'smin⁽²¹⁾ parasparaparāhatāḥ /
prakārāḥ katham ete hi yujyante nāma vastuni // (TS 1812)**

(K511,3; S622,21; Pā148b14; D85a6; P120a8) kiṃ **ca yad** etad **dāhapākādyarthakriyākāri**

⁽⁹⁾ athāpi J, S, A : tathāpi Pā, K

⁽¹⁰⁾ yāśabdagocaraḥ J, Pā (cf. gsang sgra yi spyod yul min T, na śabdagocaraḥ TSP, yāśabdagocara [sic] Suganuma 91 with n.24) : yā śabdagocaraḥ K, S : yāśabdagocara A

⁽¹¹⁾ bhavatā J, Pā, K (khyed cag gis T) : om. S, A

⁽¹²⁾ yā J, Pā, S, A : sā K

⁽¹³⁾ sā J, S, A : om. K

⁽¹⁴⁾ sā nānyā vastusvalakṣaṇāt J, S, A : sāmānyāvastusvalakṣaṇa[...] Pā

⁽¹⁵⁾ śabdagocara J (cf. sgra'i spyod yul ma yin te T) : śabdagocara S, A : om. K

⁽¹⁶⁾ sā nānyā vastusvalakṣaṇāt, kiṃ tarhi, tad eva. ata evāsau na śabdagocaraḥ, asādhāraṇatvāt svalakṣaṇe śabdāpravṛtteḥ. tatas ca śaktir eva vastu nānyad iti katham sā śaktiḥ J, S, A : om. K

⁽¹⁷⁾ prajñaptisatī J, Pā, S, A : prajñaptisatī (katham) K

⁽¹⁸⁾ iti yāvat J, Pā, K : iti S, A

⁽¹⁹⁾ iṣṭaṃ bhavatīti K, S (cf. 'dod par bya dgos T) : iṣṭaṃ bhavateṭi J, Pā, A

⁽²⁰⁾ iḥsyate J, Pā, S, A (cf. snang ba T) : iṣyate K

⁽²¹⁾ nirviśiṣṭe 'smin S, A : nirviśiṣṭesmin K

vahnādirūpam upalabhyate, * **kiṃ tad evātītānāgatāvastham** āhosvid anyat. yadi **tad eva, katham ekasmin nirviśiṣṭe**⁽²²⁾ 'smin rūpādike vastuny⁽²³⁾ **akriyādayaḥ** parasparaviruddhā dharmā **yujyante**⁽²⁴⁾, yena yathākramam anāgatavartamānātītavyavasthā syāt. yadi hi viruddhadharmādhyāse 'py ekatvaṃ syāt, utsannā tarhi bhedavyavasthā⁽²⁵⁾, tatas ca sarvam eva jagad ekam eva syāt, ekatve ca sahotpattiyādiprasaṅ-***gaḥ**^(a). (TSP ad TS 1810–1812) J194a4
J194a5

(Pā33b14; D66a7; P80a5)

ekāva-*sthāparityāge parāvasthāparigrahāt** /** J92a2
naivaitan nirviśiṣṭam ced vastv adhvasv iti kalpyate // (TS 1813)
kiṃ vai bhāvād vibhidyante 'vasthā nākartṛtāptitaḥ /
tāsām eva hi sadbhāvāt kāryasattopa-*labhyate** // (TS 1814)** J92a3

(K511,8; S623,12; Pā148b17; D85b2; P120b3) athāpy **avasthāparityāgaparigrah**abhedena bhinnatvād **adhvasu vastu na nirviśiṣṭam iti kalpyate**, evam api **kiṃ tā avasthā bhāvād** bhinnā āhosvid abhinnā iti vaktavyam.

para āha: **neti. bhidyante bhāvād** iti sambandhaḥ. kasmāt. bhāvasyā**akartṛtāptito**⁽²⁶⁾ 'kartṛtvaprasaṅgāt, anvayavyatirekābhyaṃ **tāsām evāvasthānām** kāryaṃ prati sāmartyasiddheḥ. (TSP ad TS 1813–1814)

(K511,13; S623,17; Pā149a2; D85b4; P120b5) a-***tra dūṣaṇam āha: abhedam** ityādi. J194a6

(Pā33b15; D66b2; P80a7)

abhedam anumanyante katham adhvasu vastunaḥ /
tā abhūtvā bhavantyaś ca naśyantyaś ca⁽²⁷⁾ **tadātmikāḥ // (TS 1815)**

vastunaḥ sakāśād **abhedam katham** avasthāsv **anumanyante**⁽²⁸⁾ pratipadyante, naiva, yasmād abhūtvā bhavanty avasthāḥ, bhūtvā ca vinaśyanti. na ca tathā vastv iṣṭam, sar-

⁽²²⁾ nirviśiṣṭe J, Pā, K, A : nivīśiṣṭe S

⁽²³⁾ khyad par med pa'i dngos po gcig la T for ekasmin nirviśiṣṭe 'smin rūpādike vastuni

⁽²⁴⁾ mi byed pa la sogs pa'i chos phan tshun 'gal ba'i chos yod par 'gyur T for akriyādayaḥ parasparaviruddhā dharmā yujyante

⁽²⁵⁾ 'o na de tha dad par rnam par mi bzhag go T for utsannā tarhi bhedavyavasthā

⁽²⁶⁾ akartṛtāptito K, S, A : akartṛtvāptito J, Pā

⁽²⁷⁾ naśyantyaś ca J, Pā, K, A : om. S

⁽²⁸⁾ avasthāsv anumanyante S, A : avasthānumanyante J, Pā : avasthā (sva)numanyante K

^(a) **Ce'e** PVSV 20,24f.: ekam dravyaṃ viśvaṃ syāt. tatas ca sahopattivināśau sarvasya ca sarvatropayogaḥ syāt.

vadāstitvābhyupagamāt. tataś ca **katham tā abhūtvā bhavantyo vinaśyantyaś⁽²⁹⁾ ca⁽³⁰⁾ tadātmikā** yuktāḥ, naiva, bhinnayogakṣematvāt⁽³¹⁾. anyathā hi tadātmatve tāsām⁽³²⁾ api J194a7 sadāstitvaprasaṅgo * vastusvabhāvat⁽³³⁾, tato 'vyatirekāḍ vastuno vābhūtvābhāvāḍiprasaṅgo 'vasthāsvarūpavat. (TSP ad TS 1815)

(Pā33b16; D66b1; P80a7)

avasthāyāṃ ca madhyāyāṃ svarūpeṇaiva kārakam /
J192a4 **tat tad eva svarūpaṃ ca daśa-*yor anyayor api // (TS 1816)**
tad akriyākriyābhraṃśau⁽³⁴⁾ katham asya tayor matau /
pararūpeṇa kartṛtve prāptāsyākartṛtā punaḥ // (TS 1817)
atītānāgatāvastham anyac ced analādikam /
J192a5 **tat sām̐karyā-*didoṣo 'yam asmin pakṣe nirāspadaḥ // (TS 1818)**
tad idānīm abhūtvāiva kāryayogyam prajāyate /
na ca tiṣṭhati bhūtveti siddhāsyānanvayātmatā // (TS 1819)

(K512,1; S623,23; Pā149a5; D86b6; P121a1) bhavatu cāvasthābhedaparikalpanā⁽³⁵⁾, tathāpi viruddhadharmādhyāso na parihr̥ta eva, tathā hi vastu madhyāvasthāyāṃ kiṃ **svarūpeṇa kārakam** āhosvit **pararūpeṇa**. yadi svarūpeṇa, **tad eva svarūpam anyayor api daśayor** J194a8 atītānāgatāvasthāyor astīti * **katham asya** kārakasvabhāvasyā**akriyākriyābhraṃśau⁽³⁶⁾** syātām. atha **pararūpeṇa**, tadāsyākartṛtā **punaḥ prāptety** avastutvaprasaṅgaḥ. evaṃ tāvat tad eva J194b1 vahnyādirūpam⁽³⁷⁾ atītānāgatāvasthāyāṃ * na yuktam. athānyat, **asmin pakṣe** na bhavaty eka-tra kriyākriyāḍiparasparāhatadharmasām̐karyā**didoṣaḥ**, bhinnatvād vastunaḥ. kiṃ tu yat tad dāhapākāḍikā**ryayogyam** analādikam vastu **tad abhūtvā jāyate, bhūtvā ca** vigacchatīti⁽³⁸⁾ sadāstitvābhyupagama⁽³⁹⁾-virodhaḥ syād anvayābhāvāt. (TSP ad TS 1816–1819)

(K512,11; S624,16; Pā149a9; D86a3; P121a6) syād etat: yady api kāryayogyam⁽⁴⁰⁾ abhūtvā

⁽²⁹⁾ byung nas kyang 'jig pa T for vinaśyantyaś

⁽³⁰⁾ vinaśyantyaś ca Pā, K, S, A : vinaśyantyaśya J

⁽³¹⁾ bhinnayogakṣematvāt K, S, A (cf. grub pa dang bde ba tha dad pa'i phyir T) : bhinnayogakṣematvāt J, Pā

⁽³²⁾ tadātmatve tāsām J (de'i bdag nyid yin na de dag T, cf. Sugaṇuma 93, n.34) : tadātmatvenāsām Pā, K, S, A

⁽³³⁾ dngos po'i rang bzhin T for vastusvabhāvat

⁽³⁴⁾ tad akriyākriyābhraṃśau J, Pā, S, A (cf. de yi byed pa zhig pa dang T, akriyākriyābhraṃśau TSP) : tadā kriyākriyābhraṃśau K

⁽³⁵⁾ -parikalpanā J, Pā, Schayer 50, n.2, Sugaṇuma 93 with n.36, A (yongs su brtags pa T) : -parikalpanā K, S

⁽³⁶⁾ akriyākriyābhraṃśau J, Pā, A (mi byed pa dang byed pa zhig pa T) : kriyākriyābhraṃśau K, S

⁽³⁷⁾ me la sogs pa'i rang bzhin for vahnyādirūpam

⁽³⁸⁾ iti n.e. T

⁽³⁹⁾ de'i tshe yod pa nyid du khas len pa for sadāstitvābhyupagama-

⁽⁴⁰⁾ 'bras bu la byung ba nyid T for kāryayogyam

jāyate, bhūtvā ca vigacchatīti, tathā-*py atītānāgatāvasthāyām akāryayogyam vastu vidyata eva, J194b2
tataś ca na sadāstitvābhyupagamavirodha ity āha: **sa eveti**.

(Pā34a1; D66b3; P80b2)

sa eva bhāviko bhāvo ya evārthakri-*yākṣamaḥ⁽⁴¹⁾ / J92a6
sa ca nāstī tayor yo 'sti na tasmāt kāryasambhavaḥ //^(a) (TS 1820)

sa evey arthakriyākṣamaḥ. **tayor** ity atītānāgatāvasthayoḥ. **yo 'stūti** akāryayogyāḥ. (TSP ad TS 1820)

(K512,18; S624,21; Pā149a11; D86a5; P121a8) athāpi syāt: atītasya sabhāgahetvādeḥ kārya-
yogyatvam iṣyata eva, tataś cāsiddham etan **na tasmāt kāryasambhava** (TS 1820d) ity āha: **atītaś**
ceti.

(Pā34a2; D66b4; P80b2)

atītaś ca padārtho 'yam abhūtvā bhavanāt sphuṭam /
vartamāno 'nyavat prāptaḥ⁽⁴²⁾ kādācitkatayāpi ca // (TS 1821) J92b1
sadā sattvam a-*sattvam vāhetutve 'nyānapekṣaṇāt⁽⁴³⁾ /
hetor niyatasattvas ca vartamāno 'rtha ucyate // (TS 1822)

anyavad i-*ty avivādāspadībhūtavartamānavat. **kādācitkatayāpi ceti vartamāno 'nyavat** J194b3
prāpta⁽⁴⁴⁾ iti sambandhaḥ. na cāyaṃ hetur ananvayaḥ. tathā hi hetupratyayanito yo **'rthaḥ**
sa **vartamāna ucyate**, yaś ca kādācitkaḥ⁽⁴⁵⁾ so 'vaśyaṃ hetupratyayanimittaḥ⁽⁴⁶⁾. yasmād
ahetukasya dve eva gaṭī yaduta **sadā sattvam asattvam vā, anyānapekṣaṇāt**, tasmād yaḥ
kādācitkaḥ so 'vaśyaṃ hetupratyaya-*nirmitasattvaḥ. yaś ca hetupratyayanirmitasattvaḥ⁽⁴⁷⁾ so J194b4
'vaśyaṃ vartamāna eveti⁽⁴⁸⁾ siddhā⁽⁴⁹⁾ vartamānavatena kādācitkatvasya⁽⁵⁰⁾ vyāptiḥ. (TSP ad TS
1821–1822)

⁽⁴¹⁾ evārthakriyākṣamaḥ J, Pā, S, A (cf. don byed nus pa ni T) : evāyaṃ kriyākṣamaḥ K

⁽⁴²⁾ prāptaḥ J, K, S, A : praptaḥ Pā

⁽⁴³⁾ 'nyānapekṣaṇāt K, TSP, A (gzhan la mi ltos phyir T) : 'syānapekṣaṇāt J, Pā, S

⁽⁴⁴⁾ gzhan bzhin gsal bar da ltar 'gyur T for vartamāno 'nyavat prāptaḥ

⁽⁴⁵⁾ kādācitkaḥ K, S, A : kadācitkaḥ J, Pā

⁽⁴⁶⁾ bskyed pa yin T for -nimittaḥ

⁽⁴⁷⁾ yaś ca hetupratyayanirmitasattvaḥ J, Pā, K, A (cf. gang yang rgyu dang rkyen gyis bskyed pa'i yod pa T) : om. S

⁽⁴⁸⁾ eveti K, S, A : iti J : iveti Pā

⁽⁴⁹⁾ siddhā J, Pā (cf. khyab par grub bo T) : siddham K, S, A

⁽⁵⁰⁾ kādācitkatvasya Pā, K, S, A : kadācitkatvasya J

^(a) Ce'e PV 1.166: sa pāramārthiko bhāvo ya evārthakriyākṣamaḥ /
sa ca nānveti yo 'nveti na tasmāt kāryasambhavaḥ. //

(Pā34a3; D66b5; P80b3)

pratisamkhyānirodhādivailakṣaṇyaṃ parair matam /

J92b2 **saṃskṛtatvaṃ ca rūpāder jātisthityādi-^{*}yogataḥ // (TS 1823)**

tatra jātir viśeṣaṃ kaṃ janayanty abhidhīyate /

janikāsyeti tadrūpād ajātād aparaṃ param⁽⁵¹⁾ // (TS 1824)

aśakyotpādanas tāvad ananyo 'tiśayas tataḥ /

J92b3 **sattvāt prāg api ^{*}niṣpatter niṣpattyuttarakālavat // (TS 1825)**

anayas tv atiśayo nāsti vyatirekād asaṅgateḥ /

asatkārya⁽⁵²⁾-prasaṅgaś ca tasya pūrvam asattvataḥ // (TS 1826)

J92b4 **anyathātve sthitau nāse cānyānanyavi-^{*}kalpayoḥ⁽⁵³⁾ /**

jarādiviṣayā doṣā eta evānuṣaṅgiṇaḥ // (TS 1827)

(K513,12; S625,11; Pā149a15; D86b2; P121b5) kiṃ ca yady atītānāgataṃ dravyato 'sti, tadā
J194b5 sarvasaṃskārāṇāṃ śāsvatavprasaṅgaḥ. tataś ca pratisamkhyā-^{*}nirodhādibhyo rūpādīnāṃ viśeṣo
na prāpnoti. atha **rūpādeḥ** saṃskṛtalakṣaṇayogāt **saṃskṛtatvaṃ**, nākāśādīnāṃ, tena bhavati
pratisamkhyānirodhāder vilakṣaṇyaṃ rūpāder iti **parair matam**, tad⁽⁵⁴⁾ etad asamyak. tathā
hi jātir jarā sthitir anityatā ceti catvārimāni⁽⁵⁵⁾ saṃskṛtalakṣaṇāni. tatra jātir janayati, sthitiḥ
sthāpayati, jarā jarayati, anityatā vināśayati^(a) ity evaṃ janānādir eṣāṃ vyāpāra iṣṭaḥ⁽⁵⁶⁾. (TSP
ad TS 1823)

(K513,18; S625,18; Pā149b1; D86b5; P122a1) **tatra jātis tāvat kaṃ viśeṣaṃ janayantī** saty
J194b6 **asya** rūpāder **janikety abhidhīyate**. kiṃ tasmād rūpā-^{*}deḥ **paraṃ** vyatiriktam āhosvid **aparam**
avyatiriktaṃ viśeṣaṃ janayantīti pakṣadvayam. (TSP ad TS 1824)

(K513,18; S625,13; J194b6; Pā149b6; D86b6; P122a2) tatra na **tāvad** avyatiriktam, yasmād
asau viśeṣo jātivyāpārāt **prāg api** niṣpannatvād aśakyakriyaḥ, **niṣpattyuttarakālavat**. na hi
niṣpannasya kriyā yuktā, anavasthāprasaṅgāt⁽⁵⁷⁾. (TSP ad TS 1825)

(K513,22; S625,22; Pā149b3; D86b7; P122a3) nāpi vyatirikto **'tiśayaḥ** kriyate. vyatireke hy
J194b7 **asya** rūpāder ayam atiśaya iti ^{*}sambandhāsiddheḥ⁽⁵⁸⁾. tathā hi na⁽⁵⁹⁾ tādātmyalakṣaṇaḥ sam-

⁽⁵¹⁾ aparaṃ param J, K, S, A : aparasparaṃ Pā

⁽⁵²⁾ yod pa'i 'bras bur for asatkārya-

⁽⁵³⁾ cānyānanyavikalpayoḥ J, K, S, A : cānyānānyavikalpayoḥ Pā

⁽⁵⁴⁾ tad J, K, S, A : yad Pā

⁽⁵⁵⁾ catvārimāni J, S, Pā, A (bzhi po 'di dag T) : catvārināmāni K

⁽⁵⁶⁾ 'di dag gi bya ba ni skyed pa la sogs pa 'di dag yin no T for evaṃ janānādir eṣāṃ vyāpāra iṣṭaḥ

⁽⁵⁷⁾ ha cang thal bar 'gyur ba'i phyir ro T for anavasthāprasaṅgāt

^(a) **Ce'e** AKBh 75,19f.: tatra jātis taṃ dharmāṃ janayati sthitiḥ sthāpayati jarā jarayaty anityatā vināśayati.

bandho vyatirekābhyupagamāt. anabhyupagame vā pūrvoktadoṣaprasaṅgāt. nāpi tadutpattilakṣaṇaḥ, jāter eva tadutpatteḥ. na cānyaḥ sambandho 'sti, ādhārādheyatvādīnām tadutpattyantargatatvāt. atha tadutpattir abhyupagamyate, tanmātrabhāvino viśeṣasya nityotpattiprasaṅgāj jātir idānīm kiṃkarī⁽⁶⁰⁾ syāt.

jā-*tim apekṣyotpādayatīti cet, na hy anupakāriṇyām jātāv apekṣā yuktā, atiprasaṅgāt. upakāre vā tasyopakārasyātīśayavat⁽⁶¹⁾ tattvānyatvacintāyām anavasthāprasaṅgāt⁽⁶²⁾. tasmād vyatireke sati sambandho na sidhyati. * kiṃ ca **tasyātīśayasya pūrvam asattvād asatkāryam** abhyupagataṃ bhavet. (TSP ad TS 1826)

(K514,3; S626,16; Pā149b8; D87a4; P122a8) evaṃ jarayānyathātve kriyamāṇe, sthityāvasthitau⁽⁶³⁾ 'nityatayā **ca nāśe** kriyamāṇe, eṣām anyathātvādīnām **anyānanyavikalpe** sati, ye **doṣās** te jātivaj **jarādiṣv** api vācyāḥ. (TSP ad TS 1827)

(Pā34a6; D66b7; P80b7)

svakāryārambhiṇa ime sāmārthyanīyamātmanā /
jātyādayas ca tadrūpaṃ prāk paścād api vidyate // (TS 1828)
samartharūpabhāvā-*c ca prārabhante na kiṃ tadā /
svānurūpāṃ kriyāṃ tasyāḥ prārambhe cāmitādhvatā // (TS 1829)

(K514,11; S626,20; Pā149b9; D87a5; P122b1) kiṃ ca⁽⁶⁴⁾ **jātyādīnām svakāryārambhitvaṃ**⁽⁶⁵⁾ yat tat samarthasvabhāvanīyamād iṣṭam, sa ca samarthaḥ svabhāvas teṣāṃ sarvadāstīti sadaiva sva-⁽⁶⁶⁾kāryārambhitvaprasaṅgāḥ. na ca hetupratyayaivaikalyam, teṣāṃ api sadāvasthitatvāt. tataś cātītānāgatāvasthayor jātyādibhir jananādisvakāryakaraṇād ekasmīn evādhvany **aparimitādhvaprasaṅgaḥ**. (TSP ad TS 1828–1829)

(Pā34a7; D67a1; P80b8)

kiṃ cātītādayo bhāvāḥ kṣaṇikāḥ syur na vā yadi /
ādyāḥ punas tayoh prāptā saivāparimitādhvatā * // (TS 1830)
yaḥ kṣaṇo jāyate tatra vartamāno bhavaty asau /
utpada yo vinaṣṭas ca so 'tīto bhāvī anāgataḥ // (TS 1831)

(58) sambandhāsiddheḥ J, K, S, A : sabandhāsiddheḥ Pā

(59) de re zhig add. T

(60) jātir idānīm kiṃkarī J, S, A (cf. da ni skye ba ci zhig byed par ...) : jātiḥ kiṃkarī K : jātikīṃkarī Pā

(61) atīśayavat J, K, S, A : atīśayavant Pā

(62) anavasthāprasaṅgāt K, S, A : anavasthāprasaṅgāt J, Pā

(63) avasthitau J, Pā, Sugaṇuma 96 with n.43 (cf. gnas pas gnas pa dang) : avasthite S, A : avasthiter K

(64) kiṃ ca n.e. T

(65) rang gi 'bras bu las rigs la sogs pa yod pa nyid T for jātyādīnām svakāryārambhitvaṃ

(66) sva- n.e. T

(K514,19; S627,9; Pā149b11; D87a6; P122b3) api **cātītānāgatāḥ kṣaṇikā** vā **syuḥ, na vā**⁽⁶⁷⁾ kṣaṇikā iti pakṣadvayam. tatra **yady ādyāḥ**, kṣaṇikā iti yāvat, tadā **saivāmitādhvatā prāptā**⁽⁶⁸⁾. **yaḥ kṣaṇa**⁽⁶⁹⁾ iti tām eva darśayati. (TSP ad TS 1830–1831)

(Pā34a8; D67a2; P81a1)

athāpy akṣaṇikās te syuḥ kṛtāntas te virudhyate /

J93a1 **kṣaṇikāḥ sarvasamskā-*rāḥ siddhānte hi prakāśitāḥ // (TS 1832)**

J195a3 (K514,24; S627,12; Pā149b12; D87b1; P122b5) **athākṣaṇikā** * iti pakṣaḥ, evaṃ sati kṛtānta-virodhaḥ. **kṛtāntaḥ** siddhānta ucyate. tathā hi **kṣaṇikāḥ sarvasamskārā** iti **siddhāntaḥ**. (TSP ad TS 1832)

(Pā34a9; D67a3; P81a2)

yuktibādhāpi santaś cen⁽⁷⁰⁾ **niyamāt kṣaṇabhaṅginaḥ /**

vartamānā iva prak tu pratibandho 'tra⁽⁷¹⁾ **sādhitaḥ // (TS 1833)**

J195a4 (K515,1; S627,14; Pā149b13; D87b1; P122b6) kiṃ ca na kevalaṃ siddhāntavirodhaḥ⁽⁷²⁾, 'numānavirodho⁽⁷³⁾ 'pi pratijñāyāḥ. tathā hi yat sat tat sarvaṃ kṣaṇikam, yathā **vartamānam, santaś cātītānāgatā** iti **niyamāt kṣaṇabhaṅginaḥ** prāptāḥ. **prak tu**⁽⁷⁴⁾ kṣaṇabhaṅgādhikāre **pratibandho** 'sya hetoḥ **prasādhita** iti nānaikān*-tikatvam. tathā hy arthakriyākāritvaṃ sattvalakṣaṇam, akṣaṇikasya ca kramayaugapadyābhyāṃ arthakriyāvirodhād arthakriyānivṛttau tallakṣaṇasya sattvasya nivṛttir iti sādhyavipakṣān nivṛttaṃ sattvam⁽⁷⁵⁾. (TSP ad TS 1833)

(Pā34a10; D67a3; P81a3)

J93a2 **arthakriyāsamarthāḥ syur atītānāgatā i-*me /**

na vā sāmartyasadbhāve vartamānās tadanyavat // (TS 1834)

avartamānatāyāṃ tu sarvaśaktivyoginaḥ⁽⁷⁶⁾ /

naṣṭājātāḥ prasajyante vyomatāmarasādivat // (TS 1835)

J93a3 **tulyaparyanuyogās ca sarve * vyomādayo 'kṛtāḥ /**

(67) na vā J, Pā, S, A : na K

(68) dus dpag tu med par 'gyur ba so na 'dug pa yin no T for saivāmitādhvatā prāptā

(69) de la skad cig gang T for yaḥ kṣaṇaḥ

(70) cen J, Pā, K, S, A (cf. kyang yod na ni T) : ca Schayer 58, n.1 (cf. kyang yod na ni T)

(71) 'tra J, K, Pā, A ('dir T) : 'sya S, TSP

(72) -virodhaḥ J, K, S, A : -virodhāt Pā

(73) 'numānavirodho J, S, A, Suganuma 97 with n.46 (rjes su dpag pa dang yang 'gal ba yin te T) : mānavirodho Pā, K

(74) prak tu n.e. T

(75) bsgrub bya'i mi mthun pa'i phyogs kyis yod pa la khyab po T for sādhyavipakṣān nivṛttaṃ sattvam

(76) sarvaśaktivyoginaḥ J, K, S, A : sarvaśaktiḥ viyoginaḥ Pā

anaikāntikatāklpter na te 'pi vinibandhanam // (TS 1836)
 niyatārthakriyāśaktir⁽⁷⁷⁾ bhāvānām pratyayodbhavā /
 ahetutve samaṃ sarvam upayujyeta sarvataḥ // (TS 1837)
 niyatārtha-*kriyāśaktijanma pratyayanirmitam⁽⁷⁸⁾ /
 vartamānasya bhāvasya lakṣaṇam nānyad asti ca // (TS 1838)
 atītānāgatānām ca tad akhaṇḍam samasti vaḥ /
 tat kiṃ na vartamānatvam amīśām anuśajyate // (TS 1839)

J93a4

(K515,19; S627,20; Pā149b16; D87b4; P123a1) kiṃ ca ime 'ūtānāgatā arthakriyā-samarthā⁽⁷⁹⁾ vā syuḥ, na vā samarthā iti pakṣau. yadi samarthāḥ, tadā sāmārthyasadbhāve vartamānāḥ prāpnvanti, avivādāspa-*dībhūtavartamānavat. prayogaḥ: ye ye 'rthakriyāsamarthās te vartamānāḥ, yathāvivādāspadībhūtā vartamānāḥ, arthakriyāsamarthāś cātītādaya iti svabhāva-hetuprasaṅgaḥ. na cāyam anaikāntikaḥ, yato⁽⁸⁰⁾ vartamānatvanivṛtttau naṣṭājātānām sarvasāmārthyaviyogitvaṃ prasajyeta, ākāśāmbhoroḥavat. prayogaḥ: ye vartamānā na bhavanti, te kvacit samarthā api * na bhavanti, yathā vyomāmbhoroḥam, na bhavanti cātītādayo vartamānā iti vyāpakānupalabdhiḥ. (TSP ad TS 1834–1835)

J195a5

J195a6

(K515,25; S628,14; Pā150a2; D87b7; P123a5) na cākāśapratisaṃkhyānirodhāpratisaṃkhyānirodhair asaṃskṛtair anekāntaḥ, teṣām api pakṣīkaraṇāt. ato⁽⁸¹⁾ 'naikāntikatvakalpanāyā na te nibandhanam⁽⁸²⁾. tathā hi yeyaṃ pratiniyatārthakriyāśaktir bhāvānām, sā pratyayodbhavety aṅgīkartavyam. anyathā yadi nirhetukā * syāt, tadā niyamahetor abhāvāt pratiniyatā śaktir bhāvānām na syāt. tataś ca sarvaṃ sarvasmin kārye upayujyeta. tasmād akṛtānām ākāśādīnām⁽⁸³⁾ sāmārthyaniyamo na yukta iti na te⁽⁸⁴⁾ 'naikāntikatvakalpanāyā nibandhanam. (TSP ad TS 1836)

J195a7

(K516,4; S628,20; Pā150a5; D88a3; P123a8) na ca prathame hetau saṃdigdha-*vipakṣavyāvṛttikatā⁽⁸⁵⁾, yasmān⁽⁸⁶⁾ niyatāyām arthakriyāyām yā śaktis tasyā yad etaj janma hetu-pratyayanirmitam⁽⁸⁷⁾ tad eva vartamānasya lakṣaṇam, etac ca vartamānatvalakṣaṇam⁽⁸⁸⁾

J195b1

(77) niyatārthakriyāśaktir J, Pā, A : niyamārthakriyāśaktir K, S

(78) nges par 'byung T for -nirmitam

(79) arthakriyāsamarthā K, S, A : arthakriyāsamartha J, Pā

(80) 'di ltar T for yato

(81) de dag n.e. T

(82) na te nibandhanam J, A, Suganuma 98 with n.50 (de dag ... rgyu mtshan ma yin no T) : nātinibandhanam Pā, K, S

(83) akṛtānām ākāśādīnām em. (akṛtānām ākāśādīnām [sic] J, nam mkha' la sogs pa ma byas pa'i T) : kṛtākāśādīnām Pā, S : kṛ(tasmādakṛ?)tākāśādīnām K : akṛtākāśādīnām A

(84) te J, Pā (cf. de dag ni T) : tair K, S, A

(85) -vipakṣavyāvṛttikatā em. (cf. mi mthun pa'i phyogs la ldog pa la T, vipakṣavyāvṛttika [sic] Suganuma 98 with n.52) : -vipakṣavyāvṛttikatā J, Pā : -vipakṣavyāvṛttikatā K, S, A

(86) ji ltar T for yasmān

(87) -nirmitam K, S, TS, A (bskyed pa T) : -nirmitam J, Pā

(88) vartamānatvalakṣaṇam J, Pā, K, S : vartamānasya lakṣaṇam A (cf. da ltar byung ba'i mtshan nyid)

avikalam atītādiṣv apy **astīti** nimittāntarābhāvāt **kimīti vartamānatā na** prasajyate⁽⁸⁹⁾. (TSP ad TS 1837–1839)

(Pā34a13; D67a6; P81a7)

J193a5 **svargā-*pavargasamsargayatno 'yam aphalas tataḥ /**
ihāsādhyam na kiṃcid dhi phalam atropalakṣyate // (TS 1840)

(K516,11; S629,8; Pā150a7; D88a4; P123b1) kiṃ ca yasya⁽⁹⁰⁾ atītānāgataṃ dravyato 'sti, tasya⁽⁹¹⁾ phalam api nityam astīti^(a) **svargāpavargaprāptyartha yatno** viphalāḥ syāt,
J195b2 **ihāsādhyasya**⁽⁹²⁾ kasyacit **phalasyā-*bhāvāt**.

kiṃ tatra vrataniyamādilakṣaṇāyā⁽⁹³⁾ ihāyāḥ⁽⁹⁴⁾ sāmārthyam syāt. utpādane sāmārthyam iti cet, utpādanaṃ tarhy abhūtvā bhavatīti siddham. atha tad apy asti, kasyedānīm kva sāmārthyam.^(b) vartamānikaraṇasāmārthyam iti cet, kim idaṃ vartamānikaraṇam nāma. deśāntarākaraṇam cet, nityam tarhi vastu prasaktam,^(c) sarvadāvasthitatvāt. arūpāṇam vedanādīnām niṣkriyatvāt katham
J195b3 ākaraṇam * bhavet.^(d) yac ca tad ākaraṇam, tad abhūtvā bhavatīti siddham.^(e) **svargaḥ** sumeru-prṣṭhādih, **apavargo** mokṣaḥ, tayoh prāptih **samsargaḥ**, tatra **yatno** vrataniyamādih⁽⁹⁵⁾. (TSP ad TS 1840)

(Pā34a14; D67a7; P81a7)

atha nārthakriyāśaktis⁽⁹⁶⁾ **teṣām abhyupagamyate /**
J193b1 **yady evam ata evaiṣām asattvam vyomapuṣpa-*vat // (TS 1841)**

(K516,21; S629,17; Pā150a12; D88b1; P123b6) **atha nārthakriyāsamarthā**⁽⁹⁷⁾ iti dvitīya-

⁽⁸⁹⁾ na prasajyate J, S, A : (na) prasajyate K : prasajyate Pā

⁽⁹⁰⁾ gang gi ltar na T for yasya

⁽⁹¹⁾ de'i ltar na T for tasya

⁽⁹²⁾ 'di bṣgrub par bya ba la T for ihāsādhyasya

⁽⁹³⁾ tatravrata niyamādilakṣaṇāyā (sic) K

⁽⁹⁴⁾ mi g-yo ba T for ihāyāḥ

⁽⁹⁵⁾ vrataniyamādih A (vrataniyamādi- TSP 629,10, brtul zhugs dang nges pa la sogs pa T) : vrataniyatādih J, Pā, K, S

⁽⁹⁶⁾ nārthakriyāśaktis J, K, A : nārthe kriyāśaktis Pā, S

⁽⁹⁷⁾ nārthakriyāsamarthā J, K, A : nārthe kriyā samarthā S : nārthe kriyāsamarthā Pā

^(a) **Ce'e** AKBh 300,21: yasya tv atītānāgataṃ dravyato 'sti tasya phalam nityam evāstīti.

^(b) **Ce'e** AKBh 300,22–301,1: kiṃ tatra karmaṇaḥ sāmārthyam. utpādane sāmārthyam. utpādaṃ tarhy abhūtvā bhavatīti siddham. atha sarvam eva cāsti. kasyedānīm kva sāmārthyam.

^(c) **Ce'e** AKBh 301,3: vartamānikaraṇe tarhi sāmārthyam. kim idaṃ vartamānikaraṇam nāma. deśāntarākaraṇam cet, nityam prasaktam.

^(d) **Ce'e** AKBh 301,4: arūpiṇam ca katham tat.

^(e) **Ce'e** AKBh 301,4f.: yac ca tad ākaraṇam tad abhūtvā bhūtam.

pakṣa āśrīyate, **evam** tarhy **ata evārthakriyāśūnyatvād**⁽⁹⁸⁾ **asattvaṃ** prāpnoti, **khapuṣpavat**, sarva-sāmarthyavivekalakṣaṇatvād⁽⁹⁹⁾ asattvasya^(a). (TSP ad TS 1841)

(K516,23; S629,20; Pā150a13; D88b2; P123b7) **evam** tāvad atītānāgatānām asattāsādhakaṃ pramāṇam abhidhāya sattāsādhakaṃ pra-*māṇam apākartum āha: **hetava** ityādi. J195b4

(Pā34a14; D67a7; P81a8)

hetavo bhāvadharmaś⁽¹⁰⁰⁾ **tu nāsiddhe siddhibhāgiṇaḥ**⁽¹⁰¹⁾ /
vartamānatvasiddher vā viruddhā dharmibādhanāt // (TS 1842)

hetavo hi pūrvoktā adhvasaṃgrhītatvād ityādaya āśrayāsiddhāḥ, atītāder dharmaṇo 'siddhatvāt. yathāha:

nāsiddhe bhāvadharmaś 'sti^(b)

iti. athāpi siddhāḥ syuḥ, tathāpi **vartamānatvasiddher** dharmisvarūpaviparītasāadhanād⁽¹⁰²⁾ **viruddhā** hetavaḥ. (TSP ad TS 1842)

(K517,3; S629,25; Pā150a15; D88b4; P124a2) **katham idānīm adhvasaṃgrhītatvam atītānāgatānām rūpādīnām nirdiṣṭam, na hi śaśaviṣāṇam**⁽¹⁰³⁾ atyantāsad a-*tītam anāgatam vā vyavasthāpyata ity āha: **bhūtvetyādi**. J195b5

(Pā34a15; D67b1; P81b1)

bhūtvā yad vīgatam rūpaṃ tad atītam prakāśitam /
sati pratyayasāka-*lye bhāvi yat tad anāgatam // (TS 1843)
sattve tu vartamānatvam āsajyete sādhitam /
vidyamānatvamātram hi vartamānasya lakṣaṇam // (TS 1844)

subodham. (TSP ad TS 1843–1844)

⁽⁹⁸⁾ don byed nus pa thams cad kyis T for arthakriyāśūnyatvād

⁽⁹⁹⁾ ... mtshan ni don byed nus pa thams cad kyis dben pa yin pa' phyir T for sarvasāmarthyavivekalakṣaṇatvād

⁽¹⁰⁰⁾ dngos med chos T for bhāvadharmaś

⁽¹⁰¹⁾ siddhibhāgiṇaḥ J, K, S, A : siddhabhāgiṇaḥ Pā

⁽¹⁰²⁾ dharmisvarūpaviparītasāadhanād A (dharmibādhanāt TS 1842d) : dharmasvarūpaviparītasāadhanād J, Pā, K, S (chos kyī rang gi ngo bo phyin ci log tu grub pas T)

⁽¹⁰³⁾ ri bong gi rwa la sogs pa T for śaśaviṣāṇam

^(a) Cf. HB 19*,11: sarva-śakti-viraho abhāvalakṣaṇam.

^(b) Cf. PV 1.191a': nāsiddhe bhāvadharmaś 'sti. (cf. TSP 504,19.)

(K517,10; S630,14; Pā150a16; D88b5; P124a3) rūpavedanādhāvas tarhi katham nirdiṣṭa ity āha: **rūpādīvam** ityādi.

(Pā34a16; D67b2; P81b2)

rūpādīvam atītāder bhūtām tām bhāvinīm tathā /
J93b3 **adhyā-*ropya daśām asya kathyate na tu bhāvataḥ // (TS 1845)**

tām daśām⁽¹⁰⁴⁾ iti tām avasthām. (TSP ad TS 1845)

(K517,14; S630,16; Pā150a17; D88b6; P124a4) dvyāśrayam tarhi katham vijñānam ukta^(a) ity āha: **dvayam pratīyeti**⁽¹⁰⁵⁾.

(Pā34a17; D67b2; P81b3)

dvayam pratītya vijñānam^(b) **yad uktaṃ tattvadarśinā /**
seṣṭā saviṣayam cittam abhisamdhāya deśanā // (TS 1846)

dvididham hi vijñānam sālambanam anālambanam ca. yat sālambanam tad **abhisamdhāya** dvyāśrayavijñānadeśanā bhagavataḥ. (TSP ad TS 1846)

(K517,19; S630,19; Pā150b1; D88b7; P124a5) atha nirālambanam api jñānam astīti katham J195b6 **ava-*sitam ity āha: nityeśvarādītyādi.**

(Pā34b1; D67b3; P81b4)

J93b4 **nityeśvarādibuddhīnām naivālambana-*m asti hi /**
śabdanāmādidharmānām tadākāravīyuktitaḥ // (TS 1847)

ādīśabdena pradhānakālādayaḥ paraparikalpitā⁽¹⁰⁶⁾ gr̥hyante. na caitan mantavyam śabdādy⁽¹⁰⁷⁾-ālambanā imā buddhaya iti, kathyati: **śabdanāmādītyādi**⁽¹⁰⁸⁾. **tasyeśvarāder**

⁽¹⁰⁴⁾ tām daśām J, K, S, A : tāddaśām Pā

⁽¹⁰⁵⁾ pratīyeti K, S, A : pratīyeta J, Pā

⁽¹⁰⁶⁾ paraparikalpitā em. (gzhan gyis kun du brtags pa T, Suganuma n.57) : parikalpitā J, Pā, K, S, A

⁽¹⁰⁷⁾ -ādi- n.e. T

⁽¹⁰⁸⁾ -nāmādītyādi K, S, A : -nāmādītyādi J : -nāmāpītyādi Pā

sgra dang ming zhes bya ba la sogs pa for śabdanāmādītyādi

^(a) Cf. TS 1787cd: dvyāśrayam ca vijñānam tāyinā kathitam katham /

^(b) **Cee** 『雜阿含經』 Taisho 99, vol. 2, 54a23f. 有二因緣生識。(AKBh 295, 14; 464,10f.; 467,2: dvayam pratītya vijñānasyaotpādaḥ [bhavati AKBh 464,11].) Cf. *Samyuttanikāya* (PTS) IV 67, ADV 269,2, TSP 616,6f. (See also 志賀 [2015: 170,2–5 with n.(a) and (b)].)

ākāro nityatvasakalahetuvādiḥ⁽¹⁰⁹⁾, yas tayā buddhyādhyavasāyate, **tenākāreṇa** viyogaḥ **śabdasya nāmno** vā viprayuktasamskāraviśeṣasya. **ādiśabdena** nimittādeḥ paropaga-*tasyārtha-pratibimbakādisvabhāvasya⁽¹¹⁰⁾. (TSP ad TS 1847)

J195b7

(K517,27; S630,25; Pā150b4; D89a3; P124b1) yadi tarhi nirviṣayam api vijñānam asti, tat kathaṃ jñānam iti vyapadiśyate. tathā hi⁽¹¹¹⁾ vijñānātīti vijñānam^(a) iti gīyate, asati ca vijñeये kiṃ vijānato⁽¹¹²⁾ vijñānaṃ syād ity āha: **bodhānugatimātreṇa**-*ti⁽¹¹³⁾.

J196a1

(Pā34b1; D67b3; P81b4)

bodhānugatimātreṇa vijñānam iti cocyate /

sā cāsyājaḍarūpatvaṃ prakāśyāt parikalpitam // (TS 1848)

bodhānugamo 'pi vinā bodhyena⁽¹¹⁴⁾ na⁽¹¹⁵⁾ sambhavatīti cet, āha⁽¹¹⁶⁾: **sā ceti. sā bodhānugatiḥ. asya vijñānasya. kim ucyate. yat tad ajaḍarūpatvam**, prakāśyavastv-antarābhāvāt prakāśāntaravirahāc ca nabhovartyālokavat, prakāśarūpatvād⁽¹¹⁷⁾ abhidhīyate bodhārūpateti. (TSP ad TS 1848)

(K518,9; S631,13; Pā150b7; D89a5; P124b4) karmātītaṃ ca kathaṃ phaladam^(b) ity atrāha: **vipākahetur** ityādi.

(Pā34b2; D67b4; P81b5)

vipākahe-*tuḥ phalado nātīto 'bhyupagamyate /

tadvāsītāt⁽¹¹⁸⁾ tu vijñānaprabandhāt phalam iṣyate // (TS 1849)

J93b5

⁽¹⁰⁹⁾ srid pa gzugs kyi rgyu nyid la sogs pa'i T for -sakalahetuvādiḥ

⁽¹¹⁰⁾ sogs pa'i sgras ni rgyu mtshan la sogs pa ... don gyis gzugs brnyan gyi rang bzhin gzung ngo T for ādiśabdena nimittādeḥ ... arthapratibimbakādisvabhāvasya

⁽¹¹¹⁾ de bzhin du T for tathā hi

⁽¹¹²⁾ kiṃ vijānato S, A : kiṃ vijānata J : kiṃ vijānato Pā : kiṃ K

⁽¹¹³⁾ -mātreṇeti Pā, K, S, A : -mātrenati J

⁽¹¹⁴⁾ bodhyena J, Pā, A, Sugaṇuma 101 with n.64 (rtogs par bya bar T) : bodhena K, S

⁽¹¹⁵⁾ na J, S, A : (na) K : om. Pā

⁽¹¹⁶⁾ cet, āha K, S : ced ity āha J, Pā, A

⁽¹¹⁷⁾ gsal ba smos pa'i phyir T for prakāśarūpatvād

⁽¹¹⁸⁾ tadvāsītāt J, S, A, Schayer 66, n.1, Sugaṇuma 101 with n. 65 (cf. de yi bag chags ldan T) : sadvāsītāt Pā, K

^(a) Ce' AKBh 61,21: vijñānātīti vijñānam.

^(b) Cf. TS 1788ab: karmātītaṃ ca niḥsattvaṃ kathaṃ phaladam iṣyate /

vāsitaṃ paramparayā⁽¹¹⁹⁾ phalotpādanasamartham utpāditam⁽¹²⁰⁾. (TSP ad TS 1849)

J196a2 (K518,13; S631,15; Pā150b7; D89a6; P124b5) yady evam, katham uktaṃ * bhagavatā⁽¹²¹⁾:

asti tat karma yat kṣīṇaṃ niruddhaṃ vipariṇatam^(a)

ity āha: **tām** eveti.

(Pā34b2; D67b4; P81b6)

tām eva vāsanāṃ cetaḥsaṃtatāv adhikṛtya tat /

asti karmeti nirdiṣṭaṃ bhaktyā mūlāvināśavat // (TS 1850)

bhaktyety upacāreṇa. yathā mūladravya⁽¹²²⁾-prasūtasya hiranyādeḥ phalaprabandhasya⁽¹²³⁾ sadbhāve⁽¹²⁴⁾ vinaṣṭam api **mūladravyaṃ**⁽¹²⁵⁾ avinaṣṭam ity ucyate, tadvat **karmāpi**⁽¹²⁶⁾. (TSP ad TS 1850)

(K518,19; S631,19; Pā150b9; D89b1; P124b7) upacāreṇa⁽¹²⁷⁾ deśanāyāḥ kiṃ prayojanam ity āha: **ucchedadrṣṭi**.

(Pā34b3; D67b5; P81b6)

J94a1 * **ucchedadrṣṭināśāya caivam śāstrā prakāśitam** /

anyathā śūnyatāsūtre deśanā nīyate katham // (TS 1851)

J196a3 nāsty atītaṃ karmety ukte pāramparyeṇa yat phalotpādanasāmarthyam⁽¹²⁸⁾ āhitam atītena karma-*nā⁽¹²⁹⁾, tasyāpy abhāvaṃ pratipadyerann ity **ucchedadrṣṭim** āpannāḥ syur vineyā

⁽¹¹⁹⁾ dgos pa'i bgyud nas T for vāsitaṃ paramparayā

⁽¹²⁰⁾ grub pa'o T for utpāditam

⁽¹²¹⁾ bhagavatā Pā, K, S, A : bhavagatā J

⁽¹²²⁾ rgyu'i rdzas T for mūladravya-

⁽¹²³⁾ phalaprabandhasya K, S, A : phalaprabandhasye J : phalaṃ prabandhasya Pā

⁽¹²⁴⁾ sadbhāve J, Suganuma 101 with n.68 (yod na T) : sabhāve Pā : sambhāve A : samabhāve S : sa(ma)bhāve K

⁽¹²⁵⁾ rgyu'i rdzas T for mūladravyaṃ

⁽¹²⁶⁾ las rnams kyang T for karmāpi

⁽¹²⁷⁾ upacāreṇa K, S, Pā, A : ucāreṇa J

phal par T for upacāreṇa

⁽¹²⁸⁾ rgyu dang 'bras bu bskyed pa'i nus pa ... gang yin pa T for pāramparyeṇa yat phalotpādanasāmarthyam

⁽¹²⁹⁾ 'das pa'i las des bsgos pa T for āhitam atītena karmaṇā

^(a) **Ce(?)** *Samyuktakāgama* (AKVy 473,16) (Also quoted in AKBh 299,8–13: yat tarhi laguḍaśīkhīyakān parivrājakān adhikṛtyoktaṃ bhagavatā: yat karmābhyatītaṃ kṣīṇaṃ niruddhaṃ vīgataṃ vipariṇatam, tad asti.)
See also 秋本・本庄 [1978: 101f.], Honjo[1984: 78f.], Pāsādika[1986: 98].

ity asti karmety uktaṃ bhagavatā.^(a) **anyathā** hi yady atītaṃ svarūpeṇa syāt^(b), tadā paramārthaśūnyatāsūtre deśanā katham nīyate:

cakṣur utpadyamānaṃ na kutaścīd āgacchati. niruddhyamānaṃ⁽¹³⁰⁾ na kvacit saṃnicayaṃ gacchati hi cakṣur abhūtvā bhavati bhūtvā ca prativigacchati^(c)

iti.^(d)

(K518,26; S632,9; Pā150b12; D89b3; P125a1) vartamāne 'dhvany abhūtvā bhavatīti cet, na, adhvano * bhāvānarthāntaratvāt,^(e)

J196a4

ta⁽¹³¹⁾ evādhvā kathāvastv^(f)

iti vacanāt⁽¹³²⁾. atha svātmāny abhūtvā bhavati, tadā⁽¹³³⁾ siddham anāgataṃ cakṣur nāstīti.^(g) api ca sadāvasthitatve saṃskārāṇāṃ hetuphalayor abhāvāt duḥkhasamudayasatyābhāvāḥ⁽¹³⁴⁾, tadabhāvān nirodhamārgayor⁽¹³⁵⁾ api, tataś ca satyacatuṣṭayābhāvāt pariññāprahāṇasākṣāt-kriyābhāvānā na yujyante, tadabhāvāc ca phalasthānāṃ pra-*tipannakānāṃ ca pudgalānām

J196a5

⁽¹³⁰⁾ niruddhyamānaṃ J, K, S, A : na niruddhyamānaṃ Pā

⁽¹³¹⁾ ta J, Pā, K, A : tatra S

⁽¹³²⁾ evādhvā kathāvastv iti vacanāt em. (de dag nyid dus gtam gzhi dang // zhes bshad pa'i phyir ro // T, Schayer 67, n.4, AK 1.7cd) : evādhvānas tathāvasthithivacanāt J, K, S, Pā, A

⁽¹³³⁾ tadā J, S, A : tathā Pā, K

⁽¹³⁴⁾ duḥkhasamudayasatyābhāvāḥ J, A (sdug bsngal dang kun 'byung ba'i bden pa med pa T) : dukhasamudayasatyābhāvāḥ S : duḥsamudayasatyābhāvāḥ Pā, K

⁽¹³⁵⁾ tadabhāvān nirodhamārgayor J, K, S, A : tadabhāvānirodhamārgayor Pā

^(a) Cf. AKBh 299,10f.: tatra punas tadāhitam tasyāṃ saṃtatau phaladānasāmarthyam saṃdhāyoktam. Cf. also AKBhṬ D142b1f.; P279a2–4; 秋本 [1996: 113,4–9]: **des kun tu drangs pa** ni las des kun tu drangs shing skyed pa'o // de yang gang zhe na / **'bras bu skyed pa'i mthu yod pa'o** // 'di ltar las des rgyud 'bras bu khyad par can bskyed par nus par byed de / de' i phyir bcom ldan 'das kyis las de 'gags kyang des kun tu drangs pa 'bras bu skyed pa'i mthu yod pa nyid du bstan pa'i phyir de ni yod do zhes gsungs so //

^(b) Cf. AKBh 299,11: anyathā hi svena bhāvena vidyamānam atītaṃ na sidhyet.

^(c) Ce 『雜阿含經 (卷第十三)』 Taisho 99, vol. 2, 92c16–18: 諸比丘。眼生時無有來處。滅時無有去處。如是眼不實而生。生已盡滅。(Also quoted in AKBh 299,12–14: cakṣur utpadyamānaṃ na kutaścīd āgacchati, niruddhyamānaṃ na kvacit saṃnicayaṃ gacchati hi bhikṣavaś cakṣur abhūtvā bhavati, bhūtvā ca prativigacchati. Cf. ADV 267,1–2; 267,6–7; 267,12; 268,5.)

Cf. 『仏説勝義空經』 Taisho 655, vol. 15, 807a1–3: 謂眼生時而無少法有所從來。又眼滅時亦無少法離散可去。諸必芻其眼無實離於實法。

See also 秋本・本庄 [1978: 102], Honjo [1984: 78f.], Pāsādika [1986: 98].

^(d) Cf. AKBh 299,12–16: itthaṃ caitad evaṃ yat paramārthaśūnyatāyāṃ uktaṃ bhagavatā: cakṣur utpadyamānaṃ na kutaścīd āgacchati, niruddhyamānaṃ na kvacit saṃnicayaṃ gacchati hi bhikṣavaś cakṣur abhūtvā bhavati, bhūtvā ca prativigacchati.

^(e) Ce'e AKBh 299,14–15.: vartamāne 'dhvany abhūtvā bhavatīti cet, na, adhvano bhāvād anarthāntaratvāt.

^(f) Ce AK 1.7c: ta evādhvā kathāvastu. (See also Schayer [1938: 67 with n.4])

abhāva iti sakalam eva pravacanam virudhyata⁽¹³⁶⁾ iti nātītādīvastujātakalpanā⁽¹³⁷⁾ sādhvī.^(a) (TSP ad TS 1851)

(K519,6; S632,16; Pā150b15; D89b6; P125a5) atītānāgatājñānam⁽¹³⁸⁾ vibhaktam yoginām katham^(b) ity atrāha: **pāramparyeṇetyādi**.

(Pā34b4; D67b5; P81b7)

pāramparyeṇa sāksād vā kāryakāraṇatām gatam /

J94a2 **yad rūpaṃ vartamānasya * tad vijānanti yoginaḥ // (TS 1852)**

anugacchanti paścāc ca vikalpānugatātmabhiḥ /

śuddhalaukikavijñānais tattvato 'viṣayair'⁽¹³⁹⁾ api // (TS 1853)

J94a3 **tad dhetuphalayoḥ bhūtām bhāvinīm caiva saṃtatim⁽¹⁴⁰⁾ * /**

tām āśritya⁽¹⁴¹⁾ pravartante 'tītānāgatadeśanāḥ // (TS 1854)^(c)

samastakalpanājālarahitajñānasamṭateḥ /

tathāgatasya vartante 'nābhogenaiva deśanāḥ // (TS 1855)

traikālyaparīkṣā.

J196a6 atītārthāpekṣayā **kāryatām gatam**, anāgatāpekṣayā **kāraṇatām**. **vikalpānugatātmabhir** iti savikalpair ity arthaḥ. **tattvato 'viṣayair** ity āviṣṭābhilā-*pair jñānaiḥ⁽¹⁴²⁾, svalakṣaṇasyāviṣayīkaraṇāt. **tat** tasmāt. **hetuphalayoḥ saṃtatim bhūtām bhāvinīm cāśritya⁽¹⁴³⁾ atītādīdeśanā** yoginām aparīśuddhānām **pravartante**. bhagavatas tu tathāgatasya

⁽¹³⁶⁾ virudhyata J ('gal bas T, 'gal AKBhT) : nirudhyata Pā, K, S, A

⁽¹³⁷⁾ dngos po yod par brtags pa for -vastujātakalpanā

⁽¹³⁸⁾ atītānāgatājñānam Pā, K (cf. 'das pa dang ma 'ongs pa'i shes pa T, atītānāgate jñānam TS 1788c) : atītānāgatam jñānam J, S, A

⁽¹³⁹⁾ 'viṣayair J, Pā, K, S (cf. nirviṣayair TSP 1090,9) : viṣayair TSP 1090,15

⁽¹⁴⁰⁾ saṃtatim J, Pā, S, A : sannatim K

⁽¹⁴¹⁾ tām āśritya J, Pā, K, S, A : samāśritya TSP(S) 1090,17 (=TSP[K])

⁽¹⁴²⁾ jñānaiḥ J, K, S, A : jñānai Pā

⁽¹⁴³⁾ cāśritya J, Pā, S, A : cāśrītā K

Cf. AKBhT D142b6: de skad du / de dag nyid dus gtam gzhi dang // zhes bshad do //

^(g) **Ce'e** AKBh 299,15–16.: atha svātmāny abhūtāvā bhavati. siddham idam anāgatam cakṣur nāstīti.

^(a) **Ce'e** AKBhT D143a3–5; P279b7f. (P278a missing); 秋本 [1996: 114,4–10] : 'das pa dang ma 'ongs pa'i 'du byed kyī dngos po skye ba med do // sdug bsgal dang kun 'byung ba'i bden pa'i dngos po de med pa'i phyir dang / 'gog pa dang lam dag kyang de bzhiṅ te bden pa bzhi med pa'i phyir yongs su shes pa dang spangs pa dang mngon du bya ba dang bsgom pa dag kyang mi rung la / de med pa'i phyir 'bras bu la gnas pa dang zhugs pa'i gang zag rnam kyang med do // de ltar sgra ji bzhiṅ pa'i don yongs su brtags pas 'das pa dang ma 'ongs pa yod pa nyid du sgrub pa'i lung rnam mtha' dag gsung rab dang 'gal lo //

^(b) Cf. TS 1788cd: atītānāgate jñānam vibhaktam yoginām ca kim /

^(c) The verses from TS 1852 to 1854 are quoted in TSP 1090,12–17 ad TS 3472.

śuddhalaukikam api jñānaṃ nāsti, nityasamāhitatvāt sarvāvidyāprahāṇena, vikalpasya
cāvidyāsvabhāvatvāt^(a). yad āha:

vikalpaḥ svayam evāyam⁽¹⁴⁴⁾ avidyārūpatāṃ gataḥ /
svākāraṃ *bāhyarūpeṇa yasmād āropya vartate //^(b)

J196a7

iti. tasya pūrvapraṇidhānapuṇyajñānasambhārasāmarthyād avāptacintāmaṇisadrśātmabhāvasyān-
ābhogenaiva deśanāḥ pravartante (TSP ad TS 1852–1855) iti traikālyaparīkṣā.

⁽¹⁴⁴⁾ svayam evāyam Pā, K, S, A : svayamavāyam J

^(a) Cf. BCAP 183,4: vikalpaś ca sarva evāvidyāsvabhāvaḥ.

^(b) Source to be identified. The first half of this verse is quoted in BCAP 183,4f.: yad āha: vikalpaḥ svayam evāyam
avidyārūpatāṃ tataḥ / iti.

Cī'e MMA 42,3–5 (D98a4f.; P107a3f.): rnam par rtog pa ni de lta ma yin te 'di ni rang nyid ma rig pa'i ngo bo
nyid du gyur pa dang gang las rang gi rnam pa la phyi rol gyi ngo bor sgro btags nas 'jug pa yin no // (Sanskrit
22r1: naivaṃ vikalpaḥ. svayam evāyam avidyārūpatāṃ gataḥ. svākāraṃ bāhyarūpeṇa yato [']dhyāropya varttate. I
wish to express my gratitude to Dr. Li Xuezhong and Prof. Kazuo Kano for kindly showing me the diplomatic edition
of this portion.)

IV. 和訳と注解 (TSP ad TS 1809–1855)

2. 説一切有部による作用説とそれに対する批判

2.6. 仮に立てられた存在としての作用に対する批判

2.6.1. 実在としての作用＝結果を引き寄せる能力

(K510,15; S622,15) あるいは [以下のような反論が] あるかもしれない。「作用が仮に立てられた存在 (prajñaptisat) で、それ (=作用) によってなされた [三] 世 [それぞれ] の確立もまた仮に立てられた存在であるとしよう。しかしながら、その場合いかなる誤りがあるのか」というので、[シャーントラクシタは] 「*kāritrākhyā*」[云々]と答える。

作用 (*kāritra*) と呼ばれる結果を引き寄せる能力 (*phalākṣepaśakti*) は、言葉の [適用] 対象ではない⁽¹⁴⁵⁾。そして、まさしく [そのような] 能力は実在であるから、いかにして それ (=能力) が仮に立てられた存在となりえようか。 (TS 1809)

実にあなた (=サンガバドラ) によって、諸々の存在要素の作用とは結果を引き寄せる能力 [のこと] であると述べられたが、[その] 結果を引き寄せる能力は、実在の独自相とは別のものではなく、その同じもの (=実在の独自相) に他ならない。まさにこれ故、これ (=結果を引き寄せる能力) は言葉の [適用] 対象ではない。なぜなら [結果を引き寄せる能力は、他のものと] 非共通なものであるから、[そのような] 独自相に対して言葉が適用されることはないからである。それ故また、まさしく [そのような] 能力こそが実在であって、[それ] 以外のものは [実在] ではない。従って、それすなわち能力はいかにして仮に立てられた存在であるといえようか。[実際にはそのようなことは] 決してありえない、ということである。それ故また、[あなた=サンガバドラは] それ (=結果を引き寄せる能力=作用) による [三] 世の確立が [仮に立てられたものではなく] まさに真実のものであると認めたことになる⁽¹⁴⁶⁾、ということである。 (TSP ad TS 1809)

2.6.2. 同一の存在に異なる三つの性質が帰属することはありえないことの指摘

また、この [火等の] 物質的存在は燃やすことや料理すること等の結果をなすものであり、と見なされるが、まさしくその同じ [物質的存在] が、過去あるいは未来の境位に [も]

⁽¹⁴⁵⁾ Cf. Schayer[1938: 47]: “The *kāritra*, which has been defined [by you] as a potency of projecting effects, has only a nominal existence.”

⁽¹⁴⁶⁾ この箇所には、(1) *iṣṭam bhavati* (K, S) と (2) *iṣṭam bhavatā* (J, Pā) という二種の読みが存在するが、T (‘*dod par bya dgos so ...*) と同一パラグラフ内の冒頭の文章: *phalākṣepaśaktir hi dharmāṇām kāritram iti bhavatā*[*bhavatā* JS, Pā (khyeg cag gis T): om. S] *varṇitam*. においてすでに「*bhavatā* (=あなた [=サンガバドラ] によって)」という表現が用いられていること、また「[サンガバドラは]・・・認めたことになる (*iṣṭam bhavati*)」の方が文脈にも合うことから、(1) の読みを採用することとする。

あると認められるのであろうか。(TS 1810)

もしその同じ [物質的存在] が [過去あるいは未来の境位にもあると認められる] ならば、それはまさしく同一の本性をもつ [はずである] が、一体いかにして [そのようなものに、未だ] 作用がないことや、[現に] 作用 [があること] や、[その後] 作用が休止すること (kriyāvīratī) といったことがあろうか⁽¹⁴⁷⁾。(TS 1811)

相互に否定し合うこれらの特性 (prakāra)⁽¹⁴⁸⁾が、ただ一つの、[三世において] 区別されることがないこの実在に一体どのようにして結びつけられるのであろうか⁽¹⁴⁹⁾。(TS 1812)

(K511,3; S622,21) さらにまた、まさにこの火等の物質的存在は [現在] 燃やすことや料理すること等といった効果的作用をなすものとして認識されるが、まさしくその同じ [火等の物質的存在] が過去あるいは未来の境位に [も] あるのか、あるいは [それとは] 別のものが [過去あるいは未来の境位にある] のか。もしその同じ [物質的存在] が [過去あるいは未来の境位にある] ならば、ただ一つの、[三世において] 区別されることのないこの物質的存在等の実在に、[未だ] 作用のないこと等の互いに相反する諸々の属性がいかにして結び付けられるのであろうか。もし [結び付けられることが] あれば、順次、未来・現在・過去が確立されるのであろうか [実際にはそのようなことはありえない]⁽¹⁵⁰⁾。というのも、[ある事物に] 相反する [複数の] 属性が帰属するとしても⁽¹⁵¹⁾ [その事物が] ただ一つのものであるなら、その場合 [三世の] 差異の確立は消滅する [であろう] からである。またそのことから、まさに全世界はただ一つのものになってしまうのであろう。そして、[全世界が] ただ一つのものである場合、[全てのものが] 同

⁽¹⁴⁷⁾ Cf. 太田 [1979: 58]: 「その同一の存在に、[作用しおわって、もう] 作用しなかったり、現に作用していたり、[続いて] 作用を停止したりする [という区別] がどうしてあるのか。」、秋本 [2016: 278]: 「その同一の存在に未作用であること、作用があること、作用が止滅したことが一体どうしてあろうか。」

⁽¹⁴⁸⁾ TSP におけるパラフレーズ: parasparaviruddhā dharmāḥより、このように訳出した。

⁽¹⁴⁹⁾ Schayer[1938] は、TS 1811 と TS 1812 を一括して訳している。Schayer[1938]: “how can such mutually exclusive aspects as [precedent] non-activity, actual activity and [subsequent] loss of activity coexist in the same undifferentiated (*nirviśiṣṭa*) thing?” また、cf. 太田 [1979: 58]: 「この同一・不可分の実在に、どうして相矛盾する、これらの分類が妥当しようか。」、秋本 [2016: 279]: 「相互に矛盾するようなこれら [未作用であること等] の在り方が、この一つの区別されない実在に一体どうして結びつくのか。」

⁽¹⁵⁰⁾ Cf. 秋本 [2016: 280]: 「それ (A) によって順に未来・現在・過去の確立があるような未作用等の相互に矛盾する属性 (A) が、・・・」

⁽¹⁵¹⁾ ダルマキールティも、PVSV において事物の差異 (bheda) を定義する際に viruddhadharmādhyāsa という表現を用いている。

PVSV 20,21–23: ayam eva khalu bhedo bhedahetur vā bhāvānām viruddhadharmādhyāsaḥ kāraṇabhedaś ca. tau cen na bhedakau tadā na kasyacit kutaścid bheda ity ekaṃ dravyaṃ viśvaṃ syāt. 「実に、諸存在の差異とは、まさにこの相反する [複数の] 属性が [それぞれの基体に] 帰属することであり、あるいは差異の根拠とは、原因の差異である。もしそれら両者 (=相反する属性が帰属することと原因の差異) が差異をもたらすものではないとすれば、どこにも、いかなる差異もないことになるであろう。そのことから、全ての事物が同一であることになってしまうであろう。」(Cf. PVSV 86,22–25.) 上記のパスセージの解釈、また viruddhadharmādhyāsa という用語の意味については、江崎 [2004] を参照のこと。)

時に生起する等の不都合に陥る⁽¹⁵²⁾。(TSP ad TS 1810–1812)

2.6.3. 説一切有部による反論: 諸々の境位と存在 (bhāva) の不異性

[反論:] 「一つの境位を捨てる際に別の境位を獲得することから、この実在が [三] 世において区別されないことは決してない」と [説一切有部が] 考えるなら、(TS 1813)

[問い:] 諸々の境位は存在 [そのもの](bhāva) とは区別されるのか [それとも区別されないのか]。[説一切有部:] 諸々の境位は、存在そのものとは区別されない。[もし区別されるとすれば、存在そのものが結果を] 生み出すものではなくなるからである [が、実際にはそのようなことはない]。というのも、まさにそれら (=諸々の境位) が存在しているからこそ結果の存在が認識されるからである⁽¹⁵³⁾。(TS 1814)

(K511,8; S623,12) [反論:] あるいはまた [説一切有部の] 人々が, 「[ある] 境位を捨てることと [別の境位を] 獲得することというちがいでによって差異化されることから, [三] 世において実在が区別されないことはない」と考えるなら, [答:] そのような場合でも, それら諸々の境位は存在 [そのもの] と異なるのかあるいは異なるかないかということが述べられるべきである。

対論者 (=説一切有部) はいう。「諸々の境位は、存在そのものとは区別されない」と。存在 [そのもの] と区別される [ことはない] というつながりとなる。なぜか。[境位が存在そのものと区別されるとすると] 存在 [そのもの] が [結果を] 生み出すものではなくなるから、すなわち [存在そのものが結果を] 生み出すものではなくなるという不都合に陥るからである [が、実際にはそのようなことはない]。[なぜなら] まさにそれらについて、つまり諸々の境位について、肯定的随伴関係によっても否定的随伴関係によっても⁽¹⁵⁴⁾ 結果 [を生み出す] ための能力が確立されるからである⁽¹⁵⁵⁾。(TSP ad TS 1813–1814)

2.7. 三世における実在とその境位

2.7.1. 諸々の境位が実在と異なることの不可能性

(K511,13; S623,17) [シャーンタラクシタは] 以上のことに対して論駁を述べる。「**abhedam**」云々と。

⁽¹⁵²⁾ Cf. PVSV 20,23f.: *ekaṃ dravyaṃ viśvaṃ syāt. tataś ca sahotpattivinaśau sarvasya ca sarvatropayogaḥ syāt.* 「全ての事物が同一であることになってしまうであろう。またそのことから, [全てのものが] 同時に生起したり消滅したりすることになるであろうし, 全てのものが全てのものに対して寄与することになってしまうであろう。」

⁽¹⁵³⁾ Cf. 太田 [1979: 58]: 「[存在と時間的分位が別のものであれば, その存在は] 作用を為しえないものになってしまうからである。またそれら [の分位] があればこそ結果の存在が認識されるのである。」

⁽¹⁵⁴⁾ 具体的には, 諸々の境位が存在すれば結果を生み出す能力が確立され, 存在しなければ結果を生み出す能力は確立されないということを意味する。

⁽¹⁵⁵⁾ Schayer [1938: 49] は二つの理由句 (-*prasaṅgāt*, -*siddheḥ*) を並列的なものと理解し, 「諸々の境位が存在そのものと区別されない」ことの二つの理由として解釈している。しかしながら, TS 1814 の論理構造 (*na ... akartṛtāptiṭaḥ / tāsām eva hi ... upalabhyate //*) と, TSP の二つの理由句の間に並列であることを示す表現 (*ca, vā* 等) が存在しないことから, 二番目の理由句は最初の理由句にかかるものと理解した。

[説一切有部の人々は] いかにして, [三] 世において [それぞれの境位が] 実在 [自体] と異なることを認めるのであろうか。[また] いかにして, [以前には] 存在せずに現在存在し, [存在し終わって] 消滅つつあるようなそれら (= 諸々の境位) がそれ (= 実在) 自体である [と認めるのであろうか]。 (TS 1815)

[説一切有部の人々は] いかにして, [三世すなわち過去・現在・未来という三つの] 境位について [それぞれの境位が] 実在 [自体] と異なることを認めるのであろうか, すなわち理解するのであろうか。いや決して [認めることはでき] ない [はずである]。なぜなら諸々の境位は [以前] 存在せず, [現在] 存在し, 存在した後に消滅するからである。しかしながら, 実在がそのようなものであるとは認められない。[説一切有部によって実在は] 常に存在することが承認されているからである。それ故また, [以前] 存在せずに現在存在し, [存在し終わって] 消滅しつつあるようなそれら (= 諸々の境位) がそれ (= 実在) 自体であるということが, いかにして正しいといえようか。いや決して [正しく] ない。[時間の経過によって変化するとされる境位と常に存在するとされる実在は] その命運を異にするからである (bhinnayogaḥśematvāt¹⁵⁶)。というのも, さもなければ (= 境位と実在が命運を共にするならば), [諸々の境位が] それ (= 実在) 自体である以上, ちょうど実在それ自体のように, それら (= 諸々の境位) もまた常に存在するという不都合に陥るからである。あるいは [反対に], [実在は] それら (= 諸々の境位) と異なることから, ちょうど境位それ自身のように, 実在 [もまた, 以前] 存在せず [現在] 存在するなどという [有部にとって] 不都合な結果となるからである。 (TSP ad TS 1815)

2.7.2. 現在の存在とそれ自身の固有の性質が, 過去・未来の境位にあるものと同一か異なるかの検討

また, [ある実在が] 中間 (= 現在) の境位においてまさに [それ自身の] 固有の性質によって (svarūpeṇa)[結果を] もたらすもの (kāraṇa) となる場合, まさしくその同じ [実在自身の] 固有の性質は, 他の二つの状態 (= 過去と未来の境位) においても [存在することになる]。 (TS 1816)

その場合 (= 実在が自身の固有の性質によって結果をもたらすものとなる場合), これ (= 結果をもたらすことを本質とする実在) について, それら (= 未来と過去の状態) にお

⁽¹⁵⁶⁾ bhinnayogaḥśematva という複合語については, 上村・宮元 [1994: 13f., n.8] また秋本 [2016: 282, n.102] を参照のこと。一般的に yogaḥśema は「[財産の] 獲得と保持」「獲得したものの保持」「安全性」「安寧」等を意味するが, yoga は元々「車に馬などをつなぐこと」それから「移動期」「作戦活動」を, śema は「定住」「安住」を意味したとされる。そのため, yogaḥśama は本来, 「移動期にも定住期にも必要とされる財産, 基本的生活財」を意味すると考えられる。一方, 論書で頻出する bhinnayogaḥśematva という表現は, 秋本氏が指摘している通り, 二項間において同一の結果が起こることの不可能性 (一方が成立すれば, 必ず他方は不成立となり, 共に成立, 共に不成立ということはないという関係性) を意味する。(なおこの複合語は, HB 3*, 16 (abhinnayogaḥśematvāt) 等にも見られる。HB† 36, 8f., PVSVT† 121, 28–30 も参照のこと。)

ける、[それぞれ未だ]作用がないことと作用の喪失がいかにして認められようか⁽¹⁵⁷⁾。
 [一方、そのような実在が、何らかの、それ自身の固有の性質とは]別の性質によって[結果を]生み出すものとなる場合⁽¹⁵⁸⁾、やはりこれ(=結果をもたらすことを本質とする実在)は[結果を]生み出すことがなくなってしまう[ため、実在ではなくなる]。(TS 1817)
 [あるいは]過去・未来の境位にある火等は[現在のものと]異なるというならば、その場合、この選言支においてそのように[単一の実在に作用があることや作用がないこと等の相反する属性が]混在すること等の誤りが[起こる]余地はなくなる。(TS 1818)
 この場合、そのような結果をなす能力をもつ[火等の]ものは、[かつては]存在しなかったが、[現在]生起する。しかしながら、存在した後は、[説一切有部の主張するように]存在し続けるということはない。従って、これ(=結果をなす能力をもつもの)が持続性をもたないことを本質とすること(ananvayātmā)が確立される⁽¹⁵⁹⁾。(TS 1819)

(K512,1; S623,23) また、[諸々の]境位は[実在と]異なると想定するとしよう⁽¹⁶⁰⁾。そうであるとしても[一つの実在に]相反する属性が帰属することは依然として排斥されない。というのもすなわち、[そのような]実在は中間(=現在)の境位において、[それ自身の]固有の性質によって[結果を]もたらすものとなるのか、あるいは[何らかのそれとは]別の性質によって[結果をもたらすものとなる]のか⁽¹⁶¹⁾。もし[それ自身の]固有の性質によって[結果をもたらすものとなる]場合、まさしくその同じ[実在自身の]固有の性質は、他の二つの状態すなわち過去・未来の境位においてもまた存在する[ことになる]⁽¹⁶²⁾。従って、これすなわち[結果を]もたらすことを本質とする[実在]に、いかにして[未だ]作用のないことや作用の喪失がありえようか⁽¹⁶³⁾。あるいは[そのような実在が、何らかの、それ自身の固有の性質とは]別の性質によって[結果をもたらすものとなる]ならば、[説一切有部が TS 1814 で述べているように]やはりこれ(=実在)は[結果を]生み出すものでなくなることになるので、[そのようなものは現在においても]実在ではないという不都合に陥る。このようにしてまず、まさにその同じ火等

⁽¹⁵⁷⁾ Cf. 太田[1979: 58]: 「それ(作用を為すことを本性とする実在)が、どうして[現在とそれ以外という]二種の分位に於いて、作用をしたりしなかったりするのか。」

⁽¹⁵⁸⁾ Cf. Schayer[1938: 49]: “if [the thing] is active through the essence of some other being (*pararūpeṇa=parabhāvena*), ...”

⁽¹⁵⁹⁾ Cf. 秋本[2016: 282]: 「結果を生み出す効力をもつそれ(実在)は、前に無くて今存在し、存在し終わって消滅するから、今や、これ(恒常的存在)には[原因によって結果が]次々と起こってくることはないということが成立する。」, Schayer[1938: 49]: “In this manner the absence of invariable coexistence of the thing [with its Time-conditions] would be proved.”

⁽¹⁶⁰⁾ T: *gnas skabs tha dad pa yongs su brtags pa yin du chug mod* / また Schayer[1938: 50] に従い、このように訳出した。Cf. 秋本[2016: 283].

⁽¹⁶¹⁾ Cf. Schayer[1938: 50]: “... or through the *parabhāva* (=through the essence of another *vastu*.)”

⁽¹⁶²⁾ Cf. 秋本[2016: 283]: 「もし自体として[作用する]なら、その自体こそが他の二つの時間においても[即ち]過去・未来の位態においても[作用することになるはず]である。」

⁽¹⁶³⁾ Cf. Schayer[1938: 51]: “the absence of the not yet manifested and of the still vanished *kāritra* would be coexistent. How it is possible?”

の物質的存在が、過去あるいは未来の境位において[存在するという]は妥当ではない。あるいは[過去・未来の境位にある火等が現在のものと]異なるならば、この選言支において、単一のものに作用[があること]・作用がないこと等の相互に否定し合う属性が混在すること等の誤りはなくなる。[基体としての]実在が[時間の経過に応じて]異なる[ことになる]からである。しかしながら、燃やすことや料理すること等の結果をなす能力をもつその火等の実在は、[以前に]存在せず[現在]生起し、存在した後に消滅する。従って、[実在は]常に存在しているという[あなた方説一切有部が]承認していることとの矛盾が起こるだろう。なぜなら、[結果をなす能力をもつ実在が何らかの]持続性をもつことはないからである (anvayābhāvāt)⁽¹⁶⁴⁾。(TSP ad TS 1816–1819)

3. 存在(実在)と効果的作用

3.1. 効果的作用のない存在はありえないことを証明する二つの議論

3.1.1. 実在の定義

(K512,11; S624,16) 以下のような[反論]があるかもしれない。[反論:]「たとえ結果をなす能力をもつ[実在]が、[以前に]存在せずに[現在]生起し、存在した後に消滅する[と仮に認める]としても、結果をなす能力をもたない実在は過去と未来の境位においてまさしく存在する。それ故また、[実在が]常に存在することを承認することとの矛盾はない」というので、[シャーンタラクシタは]「sa eva」と答える。

効果的作用をなす能力をもつもの、まさしくそのようなものこそが真に実在する存在である。そしてそれ(=効果的作用をなす能力をもつもの=真実在)は、それら二つ(=過去と未来の境位)においては存在しない。[過去と未来の境位において]存在する[ものがあるとしても、そのような]ものから結果が生起することはない。(TS 1820)⁽¹⁶⁵⁾

⁽¹⁶⁴⁾ ここでの「anvaya」の解釈は、TSP の以下の例を参考にした。TSP 612,19f.: na tu kasyacit suvarṇātmano 'vasthānam asti, niranvayatvād utpādivināsoḥ. 「しかしながら、金を本質とするよういかなるものの存続もない。生起と消滅は[いずれも]持続性をもたないからである。」(若原 [1996: 82f.] も参照のこと。なお niranvaya という語は、刹那滅論の文脈でも同様の用法で頻出する。)

Cf. Schayer[1938: 51]: “Thus the contradiction with the accepted definition of the *vastu* as possessing a permanent existence (= *sadāstīva*) would arise as consequence of the absence of coexistence (= *anvaya*) [of the *vastu* with its *avasthās*].”

⁽¹⁶⁵⁾ 本偈を著す際、シャーンタラクシタは PV 1.166 を念頭に置いていたと考えられる。(校訂テキストの脚注も参照のこと。) 内容の比較のため、以下に PV 1.166 のテキストと訳を示しておくたい。

PV 1.166: sa pāramārthiko bhāvo ya evārthakriyākṣamaḥ /

sa ca nānveti yo 'nveti na tasmāt kāryasambhavaḥ. //

「効果的作用能力をもつもの、まさしくそのようなものこそが勝義的な存在である。そしてそのようなものは[何らかの別のものを] 随伴することはない。[何らかの個物に] 随伴する[ものがあるとしても、そのような]ものから、結果は生起することはない。」(訳については、Ota[1981: 4] も参照のこと。)

「それこそが」とは、「効果的作用をなす能力をもつものが」ということである。「その二つにおいては」とは、「過去と未来の境位においては」ということである。「存在するもの [があるとしても、そのようなものから]」とは、「結果をなす能力をもたないもの [から]」ということである。(TSP ad TS 1820)

3.1.2. 過去の事物が現在のものであることになる不都合の指摘

(K512,18; S624,21) [反論:] あるいはまた [以下のような反論が] あるかもしれない。「過去の同類因等は、まさしく結果をなす能力をもつと認められる。それ故また、『そのようなもの (= 過去と未来の境位において存在するもの) から結果が生起することはない。(TS 1820d)』ということは確立されない」というので、[シャーントラクシタは]「*añiś ca*」云々と答える。

そして、[推論式:] この過去の事物は、明らかに<現在のもの>であることになるだろう。かつては存在せず [その後] 生起するから、また時折起こるものであるから⁽¹⁶⁶⁾。ちょうど他 [の現在存在するもの] のように。(TS 1821)

[ある事物が] 原因をもたない場合、[それは] 他のもものに依存しないことから⁽¹⁶⁷⁾、常に存在しているか、常に存在していないか [のいずれか] である。そして原因によってその存在性が限定される事物は、<現在のもの>と呼ばれる。(TS 1822)

「他の [現在存在する] ものと同様に」とは、「目下議論の主題とはされていない現在存在するものと同様に」ということである。「また時折起こるものであるから」という [語句] は、「<現在のもの>であることになるだろう。ちょうど他の [現在存在するもの] のように」という [語句と] 結びつけられる⁽¹⁶⁸⁾。そしてこの [<時折起こるものであること>という] 証因が [<現在のものであること>との] 肯定的随伴関係をもたないことはない。というのもすなわち [以下のことが確立されているからである]。原因と条件によって生み出される事物、それが<現在のもの>と呼ばれる。そして時折起こるものは、必ず原因と条件にもとづいて [生じる]。原因をもたないものは他のもものに依存しないことから、[そのようなものには] 二つのあり方 (gati) すなわち常に存在するか常に存在しないか [のいずれか] しかない。それ故、時折起こるものは必ずその存在性が原因と条件によって引き起こされる。そしてその存在性が原因と条件によって引き起こされるようなものは、必ず<現在のもの>である。従って、<時折起こるこ

(166) 「*kādācitkatayā*」は先行研究において、「in consequence of its occasionalness」(Schayer[1938: 52])、「偶時的なものであるから」(菅原 [1964: 94])、「一時的存在である故に」(太田 [1979: 59])、「[因縁が揃えば] 随時に起こるものであるから」(秋本 [2016: 284]) 等と訳されている。また、cf. Schayer[1938: 52]: “because, in consequence of its occasionalness (*kādācitkatayā*), it is coming into existence after having been [previously] in-existent, ...”

(167) Schayer[1938: 52] では、「*anyānepekṣaṇāt*」が訳されていない。

(168) チベット語訳では、「*anyavad ity avivādāspadībhūtavartamānavat*」という文章と「*kādācitkatayāpi ceti vartamāno 'nyavat prāpta iti sambandhaḥ*」という文章の順序が入れ替わっている。

と>の<現在のものであること>による遍充関係は確立されている。(TSP ad TS 1821–1822)

3.1.3. 生起等の因果的存在の特徴とその特徴が生み出す特性が同一か異なるかの検討

他の者たち (= 説一切有部の人々) は、[物質的存在 (rūpa) 等の五蘊は] <考察による抑止 (pratisamkhyānirodha, 擇滅) >等 [の三無為⁽¹⁶⁹⁾] とは異なると考える⁽¹⁷⁰⁾。そして、物質的存在等 [の五蘊は] <生起 (jāti, 生) >や<存続 (sthiti, 住) >等 [の四つの特徴⁽¹⁷¹⁾] と結びつくことから、因果的存在 (saṃskṛta, 有為)⁽¹⁷²⁾である [と主張する]。(TS 1823)

それら [四つの特徴] のうち、<生起 [という特徴] >はどのような特性 (viśeṣa) を生み出すことから、これ (= 物質的存在等) を<生み出すもの (janika) >と呼ばれるのか⁽¹⁷³⁾。[それは<生起 [という特徴] >が、] 未だ生じていないその物質的存在とは別の [特性] を [生み出す場合] なのか、別ではない [特性] を [生み出す場合] なのか⁽¹⁷⁴⁾。(TS 1824) まず、[推論式:] それ (= 物質的存在) とは異ならない (= それと同一の) 特性 (atiśaya) が生み出されることはありえない⁽¹⁷⁵⁾。[そのような特性は<生起 [という特徴] >あるいはその作用の] 存在以前であっても [すでに] 完成している [ことになる] から。ちょうど完成以後の時 [に属するもの] のように⁽¹⁷⁶⁾。(TS 1825)

一方、[物質的存在と] 異なる特性 [もまた] 存在しない。[物質的存在と特性が] 相違する [場合、その] ことによって [両者の] 結びつき [が確立されること] はないからである。また、それ (= 特性) は [物質的存在の生起] 以前には存在しないことから、[何らかの原

⁽¹⁶⁹⁾ 三種の無為法 (ākāśa [空間], pratisamkhyānirodha [考察による抑止], apratisamkhyānirodha [考察によらない抑止]) は、AK 1.5c–6 において列挙され、それに続く AKBh において定義・解説がなされている。櫻部 [1969: 142–144], 齋藤他 [2011: 190–200] も参照のこと。

⁽¹⁷⁰⁾ Cf. 太田 [1979: 59]: 「他の論師たち (有部) は、択滅無為を [「色」等とは] 別の相をもつものとする。」

⁽¹⁷¹⁾ 有為法の四つの特徴 (jāti [生起], sthiti [存続], jarā [老化], anityatā [無常]) については、AK 2.45cd において列挙され、それに続く AKBh において定義・解説がなされている。齋藤他 [2011: 175–182], 櫻部 [1969: 334–345] も参照のこと。

⁽¹⁷²⁾ 有為なる [法] (saṃskṛta [dharma]) については、AK 1.7 とそれに続く AKBh において定義・解説がなされている。櫻部 [1967: 334], [1969: 145f.] も参照のこと。

⁽¹⁷³⁾ この言明は、以下の AKBh の記述を踏まえていると思われる。

AK 2.46cd: janyasya janikā jātir na hetupratyayair vinā //
na hi vinā hetupratyayasāmagryā jātir janikā bhavati.

「<生起 [という特徴] >は、生み出されるべきもの [すなわち因果的存在としての存在要素] を生み出すものであるが、諸々の原因・条件なしにそうであるわけではない。(AK 2.46cd) 原因や条件の総体なしには、生起 [という特徴] は [因果的存在としての存在要素を] 生み出すことはない。」

⁽¹⁷⁴⁾ Cf. 太田 [1979: 59]: 「そのうち、「生」によって如何なる相違が生み出されるのか。「生」は「色」の産みの親といわれる。[それでは、その相違 (viśeṣa) は] まだ生起していない「色」と一体なのか、それとも別であるか。」

⁽¹⁷⁵⁾ Cf. Schayer [1938: 52]: “if this viśeṣa (= atiśaya) is not different, then it has no potency of producing, ...”

⁽¹⁷⁶⁾ Cf. 太田 [1979: 59]: 「その中、この特長 (atiśaya) [= 相違] が [まだ生じていない「生」等と] 別でないならば、それ (「生」の働き) の起こる以前にも、その起こった後と同様に、[その特長は] 成立していることになるから、それは何も生み出すことはできない。」

因がない限り] 結果 [としての特性] もまた存在しないこと (asatkārya) になってしまうだろう⁽¹⁷⁷⁾。(TS 1826)

[<老化>・<存続>・<無常>によってそれぞれ] 変化・存続・消滅が [もたらされる] 場合, [これらについて, それぞれ物質的存在と] 異なるか異ならないかという選言肢 [が立てられた] ならば, [<生起>の場合と] まさしく同じこれらの誤りが<老化>等に関して [も] 付随する。(TS 1827)

(K513,12; S625,11) さらにまた, もし [説一切有部が主張するように] 過去と未来のものが実体として存在するならば, 全ての因果的存在は恒久なものであることになる。その場合また, [説一切有部が言うように] 物質的存在等が<考察による抑止 (擇滅)>等と異なることにはならない。[一方] もし物質的存在等は因果的存在の [四つの] 特徴 (有為の四相) と結びついていることから因果的存在であるが, 空間 (ākāśa, 虚空) 等は [因果的存在] ではないということによって, 他の者たち (=説一切有部の人々) が物質的存在等は<考察による抑止>等 [の三無為] とは異なるか考えるとして [も], このことは正しくない。すなわち, <生起>・<老化>・<存続>・<無常>というこれら四つのものが, 因果的存在の特徴である。そのうち, <生起>は生み出し, <存続>は存続させ, <老化>は老いさせ, <無常>は消滅させる, というように生み出すこと等がこれら [四つの特徴] の働きであると認められている。(TSP ad TS 1823)

(K513,18; S625,18) それら [四つの特徴] のうちまず, どのような特性を生み出すことから, <生起>が, これすなわち物質的存在等を<生み出すもの>と呼ばれるのか。[それは<生起>が] その物質的存在等とは別の [特性] すなわち異なった [特性を生み出す] 場合なのか, あるいは [物質的存在等とは] 別でない [特性] すなわち異なる特性を生み出す場合なのか。以上のような二つの選言肢が [立てられる]。(TSP ad TS 1824)

(K513,20; S625,20) そのうちまず, [<生起>が物質的存在等と] 異なる [特性を生み出す場合] ではない。なぜなら, [推論式:] この特性は, [新たに] 作り出されえない⁽¹⁷⁸⁾。<生起>の働き以前であってもすでに完成されている [ことになる] から。ちょうど完成以後の時 [に属するもの] のように。というのも, すでに完成されたものが [再度] 作り出されることは妥当ではないからである。[なぜなら] 無限遡及 [の誤り] に陥るからである⁽¹⁷⁹⁾。(TSP ad TS 1825)

(K513,22; S625,22) また, [物質的存在等と] 異なった特性が作り出されることもない。というのも異なっている場合, 「この物質的存在等のこの特性 (この物質的存在等はこの特性を有する)」という [属格で結ばれた] 結合関係は確立されないからである。すなわち, [第一に] 結合関係が同一性を特徴とすることはない。[両者の] 相違が承認されているから。あるいは [両者

⁽¹⁷⁷⁾ この偈の内容については, 秋本 [2016: 286, n.115] の解説も参照のこと。

⁽¹⁷⁸⁾ ここでの kriyā は, TS 1825ab: aśakyotpādanas ... atīśayah に従い, 上のように訳出した。Cf. Schayer[1938]: “this viśeṣa ... would be fully ineffective ...”

⁽¹⁷⁹⁾ Cf. Schayer[1938: 55]: “Indeed, what is [already] realized, is without kāritra, otherwise everything would possess its kāritra (=atiprasaṅgāt).”

の相違が] 承認されないとしても、以前に (= TS 1825 において) 述べられた誤りに陥ることになるからである⁽¹⁸⁰⁾。また、[両者の結合関係が] 因果関係を特徴とすることもない。[物質的存在等ではなく] <生起>からこそ⁽¹⁸¹⁾それ (=特性) が生起するからである⁽¹⁸²⁾。そして、[同一性および因果関係] 以外の結合関係は存在しない。保持するものと保持されるもの等 [の関係] は因果関係に含まれるからである。もし仮に因果関係が承認される場合、それ (=原因=物質的存在等) のみから生じる特性は⁽¹⁸³⁾[物質的存在等が存在する限り] 常に生起することになってしまうので、<生起>は今この時に何をなすのであろうか。

(K513,27; S626,12) [反論:] [物質的存在等は] <生起>に依存して [特性を] 生み出すのである。[答:] 実に、[結果の生起に] 寄与することのない<生起>に依存することは正しくない。過大適用となるからである。あるいは [<生起>が結果の生起に] 寄与する場合 [でも]、ちょうど特性 [について検討した] 場合と同様に、その<寄与 (upakāra) >が [物質的存在等と] 同一であるか異なるかについて考慮すれば⁽¹⁸⁴⁾、無限遡及 [の誤り] に陥るからである⁽¹⁸⁵⁾。従って、[物質的存在等と特性の間に] 相違がある場合 [も] 結合関係は確立されない。さらにまた、それすなわち特性は [物質的存在の生起] 以前には存在しないことから、[何らかの別の原因が存在しない限り] 結果 [としての特性] もまた存在しないこと⁽¹⁸⁶⁾が承認されたことになってしまうであろう。(TSP ad TS 1826)

(K514,3; S626,16) 同様にして、<老化> [という特徴] によって変化がもたらされ、<存続> [という特徴] によって保持が [なされ]、また<無常> [という特徴] によって消滅がもたら

⁽¹⁸⁰⁾ Cf. Schayer[1938: 55]: “The relation of substantial identity (*tādātmya*) is excluded by the very supposition that there is a difference, or because the aforesaid consequences would arise.”

⁽¹⁸¹⁾ ここでの *jāteḥ* は、T: *skye ba nyid las* より、従格 (ablative) と理解する。

⁽¹⁸²⁾ ここでの *tadutpatti* は、「因果関係」あるいは「それ (=原因) から生起すること」とはならず、チベット語訳 (*skye ba nyid las de byung ba'i phyir ro*) に従ってこのように訳出した。Cf. 秋本 [2016: 288]: 「[むしろ] <生>にこそ [色等との] 因果性があるからである。」

⁽¹⁸³⁾ Cf. Schayer[1938: 56]: “[The element] is a *tanmātra-kāraṇa* (=a basal, main cause). Then the *viśeṣa*, as produced exclusively by it, ...”

⁽¹⁸⁴⁾ Cf. 秋本 [2016: 288]: 「その資するもの [である<生>] は [特性と] 同じか別かの考察をすることになって、・・・」

⁽¹⁸⁵⁾ Cf. Schayer[1938: 56]: “The element produces the *viśeṣa* in correlation with the *jāti*. This assumption is possible only when the *jāti* is the *sahakāri-kāraṇa*. But then, by analysing the two alternatives of identity and not-identity in the same manner as the *viśeṣa* analysed before, we shall have a *regressus ad infinitum*.”

⁽¹⁸⁶⁾ *asatkārya* という語が用いられることから、Schayer[1939: 54 with n.2; 56] および秋本 [2016: 286, n.115; 288, n.118] が指摘している通り、議論の背景として「因中無果説 (*asatkāryavāda*)」(ニヤーヤ・ヴァイシェーシカ学派に代表される思想で、結果はあらかじめ原因の中に存在しているわけではなく、外部からの働きかけ等の複合的な原因により生起するという考え方) が念頭に置かれていると考えることもできるかもしれない。ここでは、具体的に以下のような議論が展開されていると考えられる。物質的存在 (*rūpa*) と特性 (*atiśaya*, *viśeṣa*) が異なると仮定した場合、特性は物質的存在の生起以前には存在しないことから、その特性に関して何らかの原因を想定しなければならないこととなる。しかしながら、物質的存在が特性の原因であること (両者が因果関係にあること) はすでに否定されている他、<生起>が特性の生起に寄与することも否定される。寄与すると仮定した場合でも、再度<寄与すること>と物質的存在が同一か異なるかを検討しなければならなくなり、無限遡及の誤りに陥る。従って、特性の原因であったはずの<生起>もまた実際には結果を生み出すことができない、つまり結果としての特性が存在しないということになってしまう、ということである。

される [が、その] 場合、これらの変化等に関して [物質的存在等と特性とが] 異なるか異ならぬかの選言肢が [立てられれば]、諸々の誤りは <生起> の場合と同様に、<老化> 等に対しても述べられるべきである。(TSP ad TS 1827)

3.2. 過去と未来の諸存在の作用と瞬間性

3.2.1. 生起等の特徴が過去・未来に作用をなす場合に生じる誤りの指摘

またこれらの <生起> 等 [の有為の四相] は、その能力が [結果の生起に対して] 限定されていることという本質故に⁽¹⁸⁷⁾ 自身のなすべきこと (svakārya) をなす [ことが認められる] が、[説一切有部によれば] その性質は以前にも以後にも存在する [ことになる]。(TS 1828)

[その場合] また [結果を生み出す] 能力をもつ性質は [以前にも以後にも] 存在する [ことになる] ため、どうして [<生起> 等は] その時 (=以前・以後の時) にそれ自身に相応しい (svānurūpa) 作用をなさないのか⁽¹⁸⁸⁾。しかしながらそれ (=作用) がなされる場合、[一つの時に] 無限定の [複数の] 時が存在する [ことになる]⁽¹⁸⁹⁾。(TS 1829)

(K514,11; S626,20) さらにまた、<生起> 等が自身のなすべきことをなすことは、[その] 能力をもつ本質が [結果の生起に対して] 限定されていることによって認められる。そして [説一切有部によれば]、自身のなすべきことをなす能力をもつ、それら (= <生起> 等) のそのような本質は、あらゆる時に存在する [ことになる]。従って、[<生起> 等は] まさしく常に自身のなすべきことをなし [続ける] ことになってしまう。また、原因と条件が不完全なわけでもない。それら (=原因と条件) もまた、常に存在し続けるからである。それ故また、過去と未来の境位において [も] <生起> 等によって、生み出すこと等の自身のなすべきことがなされる [ことになる] のであるから、一つの時の中に無限定の [複数の] 時が存在することになってしまう。(TSP ad TS 1828–1829)

3.2.2. 過去・未来の存在が瞬間的なものであるかどうかの検討

さらにまた、過去等の存在は瞬間的なものであるのか、[瞬間的なもの] ではないのか [のいずれか] である。もし前者である場合、両者 (=過去・未来の存在) は再び [TS 1829 の場合と] 全く同様に無限定の [複数の] 時をもつことになる⁽¹⁹⁰⁾。(TS 1830)

[過去と未来のものが瞬間的なものである場合、] その際に (=過去・未来のある時点にお

⁽¹⁸⁷⁾ Cf. Schayer[1938: 56]: “by an essential determination of their potency”

⁽¹⁸⁸⁾ Cf. Schayer[1938: 57]: “therefore why do they not always display the activity which is [produced] by their [everlasting] essential potency?” TS 1829b の tadā の解釈については、Schayer[1939: 57, n.1] も参照のこと。

⁽¹⁸⁹⁾ Cf. 太田 [1979: 69]: 「それ故に、それら [の作用] が生起しているところの、どの一つの時点をとっても [過去・現在・未来のいずれかという] 時の決定はできないことになってしまう。」

⁽¹⁹⁰⁾ Cf. 太田 [1979: 60]: 「また両者 (過去・未来) においてその時を決定できないことになる。」

いて) 生じる瞬間が現在となり、生じた後に消滅する [瞬間] が過去となり、これから生じる [瞬間] が未来となる [ことになってしまう]。(TS 1831)

(K514,19; S627,9) さらにまた、過去と未来のものは瞬間的なものであるのか、あるいは瞬間的なものではないのかという二つの選言肢 [を立てることができる]。そのうち「もし前者である場合」とは「瞬間的なものである場合」ということである。その場合、[上記と] 全く同様に [過去・未来の存在が] 無限定の [複数の] 時をもつことになる。[シャーンタラクシタは] 「yah kṣaṇo」[云々] (=TS 1831) ということによって、まさしくそのこと (=過去と未来の存在が無限定の [複数の] 時をもつこと) を示す。(TSP ad TS 1830–1831)

3.2.3. 過去・未来の存在が瞬間的なものではない場合の、説一切有部自身の教義との矛盾の指摘

あるいはまたそれら (=過去と未来のもの) が瞬間的なものではないとすると、あなた (=説一切有部) にとって [仏教の根本] 教理 (kṛtānta) が一貫性をもたない [ことになる]⁽¹⁹¹⁾。というのも、[仏教の] 定説において「あらゆる因果的存在は瞬間的なものである」と明示されているからである。(TS 1832)

(K514,24; S627,12) あるいは、「瞬間的なものではない」という選言肢の場合、定説との矛盾が [起こる]。「[根本] 教理」というのは、定説 (siddhānta) の意味で述べられている。すなわち、「あらゆる因果的存在は瞬間的なものである」というのが定説である。(TSP ad TS 1832)

3.2.4. 過去・未来の存在が実在することの、論理による排斥

[教理による排斥のみならず]、論理による排斥も [なされる]。[過去・未来のものが] 存在しているというならば、[それらは] 必然的に瞬間的に消滅する [ことになる]。ちょうど現在のもののように。一方、この場合の (=存在性という証因の瞬間性という所証との)[本質的] 結合関係 (pratibandha) は以前にすでに論証されている。(TS 1833)

(K515,1; S627,14) さらにまた、単に主張命題の、定説との矛盾のみならず、[主張命題の] 推理との矛盾も [起こる]。[推理とは] すなわち、「およそ存在しているものは、全て瞬間的なものである。ちょうど現在のもののように。そして [説一切有部の主張に従えば] 過去と未来のものは存在している」[というものである]。以上から、[過去と未来のものは] 必然的に瞬間的に消滅するということになる。一方、以前につまり瞬間的消滅 (刹那滅) に関する章 (=TS/TSP 第8章: Sthirabhāvaparīkṣā) において、この [存在性という] 証因の [瞬間性という所証との][本質的] 結合関係はすでに論証されている⁽¹⁹²⁾。従って、[存在性という証因は] 不確定 [因] では

⁽¹⁹¹⁾ Cf. Schayer[1938: 58]: “Then we shall have a contradiction with the fundamental tenet.”

⁽¹⁹²⁾ 代表的なものとして、TS 392 を挙げるができる。

ない。すなわち、存在の定義的特徴とは、効果的作用をなすことであり、瞬間的でない[こと]は、[効果的作用のなし方が] 継時的であっても同時的であっても効果的作用[をなすこと]と相反することから、効果的作用がない場合、そのこと (=効果的作用) によって特徴づけられる存在性 [もまた] ない。従って <存在性> [という証因] は、所証の異類 (=非瞬間性) から排除されている⁽¹⁹³⁾。

3.3. 過去・未来の諸存在における効果的作用の有無

3.3.1. 効果的作用をなしうる場合

3.3.1.1. 過去・未来が現在となる不都合の指摘

これらの過去と未来のものは効果的作用 [をなす] 能力をもつか、もたないかのいずれかであるはずである。[推論式 (1):] [過去と未来のものに効果的作用] 能力が存在するならば、[過去・未来のものは] 現在のものである [ことになる]。ちょうどそれら (=過去・未来のもの) 以外の他 [の現在] のもののように。(TS 1834)

一方、[推論式 (2):] [過去と未来のものに] <現在のものであること> がなければ、消滅したもの (=過去のもの) と未だ生起していない (=未来の) 諸々のものはあらゆる能力を欠くことになる。ちょうど空中の赤蓮華等のように。(TS 1835)

また、空間等あらゆる作られたものではないのものにも、同じ詰問が [向けられるが]、それらもまた [<現在のものではないこと> という証因⁽¹⁹⁴⁾が] 不確定 [因] であると判断するための根拠とはならない。(TS 1836)

諸々の存在の、[自身の結果に対して] 限定された効果的作用能力は、[諸々の原因と] 条件から生じる⁽¹⁹⁵⁾。[その効果的作用能力が] 原因をもたない場合、あらゆる場合にあらゆるものが一様に [結果の生起に] 寄与することになるであろう⁽¹⁹⁶⁾。(TS 1837)

TS 392: tathā hi santo ye nāma te sarve kṣaṇabhaṅginah /

tad yathā saṃskṛtā bhāvās tathā siddhā anantaram //

「すなわち、およそ存在するものは全て瞬間的に消滅する。諸々の因果的存在はそのようなものとして (=瞬間的なものとして) 直前で確立された。」(秋本 [2016: 291, n.122] も参照のこと。)

⁽¹⁹³⁾ 以上の箇所は、ダルマキールティによって確立された刹那滅論証を忠実に踏襲した内容となっている。同論証において否定的随伴関係 (vyatireka) は、<反所証拒斥手段 (sādhyaviparyaye bādhakapramāṇa)> によって確定される。例えば、HB 4*,5-7: sā sādhyaviparyaye hetor bādhakapramāṇavṛttiḥ. yathā yat sat tat kṣaṇikam eva, akṣaṇikatve arthakriyāvirodhāt tallakṣaṇaṃ vastutvaṃ hīyate. また、VN 2,1-4: atra vyāptisādhanaṃ viparyaye bādhakapramāṇopadarśanam. yadi na sarvaṃ sat kṛtakam vā pratikṣaṇavināśi syāt, akṣaṇikasya kramayaugapadyābhyāṃ arthakriyāyogād arthakriyāsāmarthyalakṣaṇato nivṛttam ity asad eva syāt.

⁽¹⁹⁴⁾ TSP から知られる通り、直前の TS 1835 では <能遍の非認識> による推理が提示されている。これを三支の推論式の形にすれば以下の通りとなる。「消滅したものと未だ生起していない諸々のものはあらゆる能力を欠く。現在のものではないから。ちょうど空中の赤蓮華等のように。」

⁽¹⁹⁵⁾ Cf. Schayer[1938: 59]: “The potency of elements to produce a determined *arthakriyā* is identical with origination from *pratya*.”

⁽¹⁹⁶⁾ Cf. Schayer[1938: 59]: “If there were no causal determination, all would arise out of all in the same manner.”

[ある] 限定された効果的作用をなすための能力⁽¹⁹⁷⁾の発現 (janman) は、[諸々の原因と] 条件によって引き起こされるが、[原因と条件によって引き起こされる、ある限定された効果的作用をなすための能力の発現こそが] 現在の存在の定義的特徴であって、それ以外 [の定義的特徴] は存在しない。(TS 1838)

またあなた方にとって、それ (=現在の存在の定義的特徴) は、過去と未来のものについて [も] 完全に当てはまる。従ってどうして、これら (=過去と未来のもの)[もまた] 現在のものであるという帰結に至らないことがあるのか。(TS 1839)

(K515,19; S627,20) さらにまた、これらの過去と未来のものは効果的作用 [をなす] 能力をもつのか、あるいは能力をもたないのかという二つの選言肢が [立てられる]。もし能力をもつならば、[効果的作用をなす] 能力が存在する [ことになるので、その] 場合、[過去と未来のものは] 現在のものであるということになる。ちょうど、目下議論の主題とはされていない現在のもののように。[このことは以下のように] 論式化される。[推論式 (1):] [遍充関係] およそ効果的作用能力をもつものは現在のものである。ちょうど、目下議論の主題とはされていない諸々の現在のもののように。[主題所属性] そして、過去のもの等は効果的作用能力をもつ。[結論: 過去のもの等は現在のものであることになるが、それは不合理である。] 以上は同一性の証因による帰謬 [論証] (svabhāvahetuprasaṅga) である。そして、これ (= <効果的作用能力をもつこと > という証因) は不確定 [因] ではない。なぜなら、<現在のものであること > がなければ、消滅したものと未だ生起していない諸々のものは、あらゆる能力を欠くことになるであろうからである⁽¹⁹⁸⁾。ちょうど空中にある蓮華のように。[このことは以下のように] 論式化される。[推論式 (2):] [遍充関係] [およそ] 現在のものでないものは、いかなる [作用] に対する能力ももたない。ちょうど空中の蓮華のように。[主題所属性] そして、過去のもの等は現在のものではない。[結論: 過去のもの等は、いかなる [作用] に対する能力ももたない。] 以上は能遍の非認識 [による帰謬還元論証] である。(TSP ad TS 1834–1835)

(K515,25; S628,14) また、[<現在のものではないこと > という証因が] 空間 (虚空) ・ 考察による抑止 (擇滅) ・ 考察によらない抑止 (非擇滅) という [三つの] 因果的存在でないもの (無為) によって不確定 [因] になることはない。それらもまた [論証の] 主題とされているからである。

⁽¹⁹⁷⁾ TS 1837a と 1838a には、同じ niyatārthakriyāśakti(-) という複合語が現れるが、TSP によると微妙に解釈が異なっている。前者は、「pratīniyatā śaktir ...」と言い換えられていることから、niyata-は śakti にかかっており、後者は「niyatāyām arthakriyāyām yā śaktis ...」と言い換えられていることから、niyata-は arthakriyā にかかっている (ただし TS 1838 の場合は、niyatārthakriyāśakti-janma と続く)。ここで最終的にシャーンタラクシタによって意図されている内容は変わらないと考えられるものの、訳出の際には、カマラシーラによる解釈のちがいを考慮した。なお、ここでシャーンタラクシタが言う niyatārthakriyāśakti は、ダルマキールティ等が主張する、効果的作用をもつ存在 (=諸原子の集合体) の二種の能力: pratīniyataśakti (限定的能力) と sāmānyāśakti (共通した能力) のうち前者と関連すると思われる。この用語については、稲見 [2012: 57f. with n. (10)] を参照のこと。

⁽¹⁹⁸⁾ Cf. Schayer [1938: 60]: “because it denies the predication ‘varttamānavā’ for elements which are already destroyed or which are not yet born. The privation of all potencies (=sarva-sāmarthya-viyogitva) would be the consequence, ...”

これ故、[それらは当該の証因が] 不確定 [因] であると判断 [するため] の根拠とはならない。すなわち、諸々の存在の、この [自身の結果に対して] 限定された効果的作用能力は、[諸々の原因と] 条件から生じることが認められるべきである。さもなければ、[すなわち] もし [効果的作用能力が] 原因をもたない場合、[その効果的作用能力の発現を] 限定する原因が存在しない [ことになる] ため、諸々の存在の能力が [それ自身のある結果に対して] 限定されることはなくなるであろう。それ故また、あらゆるものが、あらゆる結果に対して寄与することになるであろう。それ故、作られたものではない空間等 [三つの無為] について [その効果的作用] 能力が限定されることは正しくない。従って、それら (=三つの無為なるもの) は、不確定 [因] であることを判断 [するため] の根拠とはならない。(TSP ad TS 1836)

(K516,4; S628,20) また第一の証因 (=効果的作用能力をもつこと) には、異類 (=現在のものではないもの) からの排除が疑わしいこと [という誤りも] ない。なぜなら、[ある] 限定された効果的作用をなすための能力、その発現は [諸々の] 原因と条件によって引き起こされるのであって、まさしくそのこと (=諸々の原因と条件によって引き起こされる、ある限定された効果的作用をなすための能力の発現) こそが現在のものの定義的特徴だからである。そしてこの [〈諸々の原因と条件によって引き起こされる、ある限定された効果的作用をなすための能力の発現〉という] 現在性の定義的特徴は、[説一切有部にとって] 例外なく過去のもの等においても存在する。従って、それ以外 [には、あるものを現在のものであると判断するため] の論拠 (nimitta) はないことから⁽¹⁹⁹⁾、どうして [過去と未来のものもまた] 現在のものとなるという [誤った] 帰結が導かれなことがなかろうか。(TSP ad TS 1837-1839)

3.3.1.2. 解脱への努力が無益となる不都合の指摘

そのことから、この天界や解脱と結合するための努力は無益となる。というのも、この場合、努力によって達成されうごのような果報も見られない [ことになる] からである⁽²⁰⁰⁾。(TS 1840)

(K516,11; S629,8) さらにまた、ある人にとって過去および未来のものが実体として存在する場合、そのような人にとっては [その] 果報もまた常に存在する。従って、天界や解脱 [の境地] に到達することを目的とする努力は無益となるであろう。なぜなら、努力によって達成されうるいかなる果報も存在しない [ことになる] からである。⁽²⁰¹⁾

⁽¹⁹⁹⁾ Cf. 秋本 [2016: 294]: 「[有部によれば] 過去等のものにも欠如しないから、[また、] それ以外の [特徴を知る] 手立てもないから・・・」

⁽²⁰⁰⁾ Cf. Schayer [1938: 61]: “no religious result to be realized by striving could be pointed out.”

⁽²⁰¹⁾ YBh においても類似の議論が見られる。ただし YBh は、TS/TSP (= AKBh における経量部の立場) のように「もし過去・未来のものが実体として存在するなら、その果報も常に存在することになるため、天界・解脱への到達等のための努力も無益となる」という立場ではなく、「もし過去・未来のものが存在しなければ、業によって生じるはずの果報も存在しないことになるため、[解脱等につながる] 善い行い等も無益となる」という立場をとっており、両者の見解の前提が異なることには注意しておかなければならない。

[問い:] その場合、誓戒 (vrata)[を守ること] や自発的な規律 (niyama)[の遵守] 等⁽²⁰²⁾の特権をもつ努力には、どのような能力があるのでしょうか。[反論:] 「[何らかのものを] <生み出すこと>に対する能力 [がある]」というならば、[答論:] その場合、<生み出すこと>は「[かつて] 存在しなかったが、[現在] 存在する [ものである]」ということが確立される。もし仮に [過去の原因や未来の果報のみならず] それ (= <生み出すこと>) もまた [常に] 存在するというなら⁽²⁰³⁾、その場合何の何に対する能力があるというのか。[反論:] 「現在のものにする能力 [がある]」というならば、[答論:] この「現在のものにする」というのは一体どのようなものなのか。[反論:] 「別の場所に<引き入れること (ākarṣaṇa)>である」というならば、[答論:] その場合には実在が恒常なものであることになってしまう。[説一切有部によれば、<引き入れること>もまた] 常時存続しているからある。物質的存在ではない感受等 [の四つの蘊] には [別の場所への移動等の] 作用はないのであるから⁽²⁰⁴⁾、いかにして<引き入れること>がありえようか。そしてそのような<引き入れること> [があると]、それ (= 引き入れること) は <生み出すこと>と同様に「[かつて] 存在しなかったが、[現在] 存在する [ものである]」ということが確立される⁽²⁰⁵⁾。「svarga」とは、スメール山の頂等のことである。「apavarga」とは、[輪廻からの] 解脱のことで、その両者への到達が [両者との] 「結合」である。それ (= 両者への到達) に対する努力とは、誓戒 [を守ること] や自発的な規律 [の遵守] 等のことである。(TS 1840)

3.3.2. 効果的作用をなしえない場合

あるいはそれら (= 過去および未来のもの) に効果的作用能力があることが認められない [場合]、もしそうであるなら、これら (= 過去・未来のもの) はまさしく同じこのこと (= 効果的作用を欠いていること) から非存在である [ことになる]。ちょうど空中に [咲く]

YBh 186,8–10 (ad YS 4.12): kiṃ ca bhogabhāgīyasya[YBhVi : bhogabhogīyasya text] vāpavargabhāgīyasya vā karmaṇaḥ phalam utpitsu, yadi nirupākhyam iti, taduddeśena tena nimittena kuśalanuṣṭhānaṃ na yujyeta. 「さらにまた、もし [ある果報の] 享受に関係する [業]、あるいは解脱に関係する業の、[これから] 生じようとしている果報が表現しえないもの (非実在のもの) である場合、それ (= 果報) を [目標として] 指し示すことによる、[あるいは] その [果報という] 動力因にもとづく善なる行為が妥当ではなくなることになる。」

⁽²⁰²⁾ niyama については、いわゆるヨーガの八支のうちの第二支との関連を考慮し、YS 2.32 の内容 (śauca-samtoṣatapaḥsvādhyāyeśvarapraṇidhānāni niyamāḥ. 「勸戒とは、[身心の] 清浄と、[生命の維持に足るもの以上には求めない] 知足と、[飢と渴、寒と熱などの対立に耐え、あるいは断食するなどの] 苦行と、誦誦と、最高神に対する祈念とである。’) を参考にして訳出した。なお、秋本 [2016: 295, n. 129] によると、niyama は「個人的に決めた戒」を、vrata は「祭主が祭式時期で守る、食事、睡眠、言語活動等の抑制・禁止事項」を意味するとされる。

⁽²⁰³⁾ AKBh における並行箇所では、atha sarvam eva cāsti となっており、ここでの「それ」に対応する語は「すべてのもの」となっている。api の解釈については、以下の AKVy の記述を参考にした。AKVy 476,19f.: utpādo 'pi yady asti, na kevalam hetur anāgataṃ ca phalam ity abhiprāyaḥ.

⁽²⁰⁴⁾ Schayer[1938: 62]: “... the arūpiṇo dharmāḥ as vedanā etc., as they are without localisation in space.”

⁽²⁰⁵⁾ ここまでの部分については、AKBh に並行箇所が存在する。当該箇所の訳 (AKBh 300,21–301,5) については、秋本・本庄 [1978: 95]、小谷・本庄 [2007: 121; 139f.] も参照のこと。

華のように。(TS 1841)

(K516,21; S629,17) あるいはもし [過去および未来のものが] 効果的作用能力をもたないという第二の選言支に依拠するなら、その場合は、まさしく同じこのことからつまり効果的作用を欠いていることから [過去および未来のものは] 非存在であるということになる。ちょうど空中に [咲く] 華のように。非存在はあらゆる能力から離れていることを特徴とするからである⁽²⁰⁶⁾。(TSP ad TS 1841)

4. 三世実有論の五つの論拠に対する批判

4.1. 説一切有部によって立てられた主張命題 (TS 1789) における証因の誤りの指摘

(K516,23; S629,20) 以上のように、まず過去と未来のものが存在しないことを証明する論拠 (pramāṇa) を述べた後に、[先に説一切有部によって提示された、過去と未来のものが] 存在することを証明する論拠を否定するために、[シャーンタラクシタは] 「*hetavaḥ*」云々という。

一方、存在物の属性としての諸々の証因は、成立していない [基体] において確立されることはない。あるいは、[当該の論証の主題である過去および未来の存在要素が] 現在のものであることが確立されることから⁽²⁰⁷⁾ [諸々の証因は] 矛盾 [因] となる。[過去・未来のものという、論証の] 主題が排斥される [ことになる] からである⁽²⁰⁸⁾。(TS 1842)

実に、以前に述べられたく [過去・未来] 世によって包摂されるから > 等の証因は⁽²⁰⁹⁾、基体不成立 (所依不成) [の誤り] となる。[当該の推論式における] 過去のもの等の [論証の] 主題は成立していないから。ちょうど [ダルマキールティが]

⁽²⁰⁶⁾ これはダルマキールティの以下の言明を踏まえていると考えられる。HB 19*,11: sarvaśaktiviraho abhāvalakṣaṇam. 「非存在の定義的特徴とは、あらゆる能力を欠いていることである。」

⁽²⁰⁷⁾ T: da ltar nyid ni grub pas na (TS), da ltar byung ba nyid du grub pa'i phyir (TSP) より、理由句として訳出した。Cf. 秋本 [2016: 296f.]: 「現在であるとの論証は基体 (=過去・未来のもの) を拒斥するから・・・」 「[その属性 (証因) による] 現在のものであるとの論証は基体 (=過去・未来のもの) 自体と反対のことを証明するから・・・」

⁽²⁰⁸⁾ Cf. Schayer [1938: 62]: “Even as predicates predicating existence (=even as *bhāvadharmā*) these arguments are not [conclusive], because their [*dharmin*] is unreal. Or [their *dharmin*] possesses reality, and then [these arguments] are contradictory because, as a consequence of the reality of the present, they are contradicted by the *dharmin*.” また cf. 太田 [1979: 61]: 「しかし、[三世に包摂された「色」等の存在であるから] (1789) 等の前掲の] 諸論拠は、存在のダルマであり、[過去等に於けるダルマ所有体が] 成立しないなら、[所依不成の誤謬を犯すことになり] 確証を得たものではない。たとえ、それ (論拠) が成立したとしても、それは現在であることを証明することになるから矛盾した論拠である。」

⁽²⁰⁹⁾ この証因については、TS 1789 および TSP 616,20–22 において言及されているが、そこでは「[過去あるいは未来] 世によって包摂される物質的存在をはじめとする [五蘊] 等のものであること (adhvasaṃgraharūpādibhāva) となっている。主張命題は「過去および未来 [の存在要素] は、実体 [であること] が否定される対象ではない (TS 1789ab': na dravyāpohaviṣayā atītānāgatās tataḥ.)」というもので、同類例として「現在 [の存在] (TS 1789d': vartamānavat)」が挙げられている。

成立していない [基体] において、存在物の属性は存在しない。(PV 1.191a')

と述べているように。あるいはまた [それらの証因が] 成立するとしても、[論証の主題である過去および未来の存在要素が] 現在のものであることが確立されることから、[論証の] 主題それぞれ自体と反対のものを論証する (dharmisvarūpaviparītasādhana)⁽²¹⁰⁾ ことになるので、諸々の証因は矛盾 [因] となる⁽²¹¹⁾。(TSP ad TS 1842)

(K517,3; S629,25) [反論 (説一切有部):] 「それではどうして過去あるいは未来の物質的存在等が <過去あるいは未来> 世によって包摂される > と説示されたのか。というのも、[例えば] 絶対的に存在しないうさぎの角 [等のもの] は、過去あるいは未来のものとして確立されることはないからである」というので、[シャーンタラクシタは] 「bhūtvā」云々と答える。

存在し終わって消滅した物質的存在が過去のものであると明示される。[諸] 条件が完全である場合に生じて来るものが未来のものである。(TS 1843)

一方、[過去・未来のものが] 存在している場合、[それらは] 現在のものであるという帰結に至るはずであることは [すでに] 証明された。というのも、単に <現に存在していること > のみが、現在のものの特徴であるからである。(TS 1844)

以上のことは理解が容易である。

4.2. [1.4.5. 経証 (2)] に対する批判

(K517,10; S630,14) [問い:] 「その場合、どうして物質的存在 (色)・感受 (受) 等 [五蘊] の [過去あるいは未来における] 存在が [世尊ブツダによって] 説示されたのか」というならば、[シャーンタラクシタは] 「rūpādīvam」云々と答える。

⁽²¹⁰⁾ 文脈から、dharmasvarūpaviparītasādhana (J, K, S, Pā, T) を dharmisvarūpaviparītasādhana に訂正する。なお、NP では dharmasvarūpaviparītasādhana の具体例として、「音声は恒常である。作られたものであるから、あるいは努力の直後に生じるから」という推論式が挙げられている。

NP 7,4: tatra dharmasvarūpaviparītasādhanaḥ, yathā nityaḥ śabdaḥ kṛtakatvāt prayatnānantarīyakatvād veti. ayaṃ hetur vipakṣa eva asty ato nityatvalakṣaṇasya sādhyadharmasya svarūpaviparītam anityatvaṃ sādhyatīti dharmasvarūpaviparītasādhanaḥ viruddhaḥ.

NP の例からもわかる通り、dharmasvarūpa というのは通例、所証属性それ自体 (= 恒常性) を指す。しかしながら当該のケースの場合、所証属性は「実体であることが否定される対象ではないこと」であり、必ずしも「現在であること」と相反する関係にあるとはいえない。おそらくここでは、論証の主題自体の属性つまり「過去および未来のものであること」と「現在であること」が相反する関係となるため、証因が矛盾因となると考えられているようである。

⁽²¹¹⁾ Cf. Schayer[1938: 63]: “Now let us suppose that past and future things are ascertained (*siddha*). Then the arguments [of the Vaibhāṣikas] are contradictory [*viruddha*] because accepting [as homogeneous instance] the reality of the present, we would prove just the contrary of what is the essence (*svarūpa*) of the probandum (*dharmasādhya-dharma*).”

[確かに世尊ブツダは、] 過去のもの等 [もまた] 物質的存在等 [の五蘊に包含されるとお説きになったが]⁽²¹²⁾、それは、これ (=過去のもの等) のかつて存在した状態とこれから存在する状態を仮に [存在するものと] 見なした上でそのように説かれたのであって、[過去等のものが] 実際に存在するから [そのように説かれたわけ] ではない⁽²¹³⁾⁽²¹⁴⁾。
(TS 1845)

「*tām daśām*」とは、その (=過去あるいは未来の) 状態 (*avasthā*) のことである⁽²¹⁵⁾。

4.3. [1.4.2. 経証 (1)] に対する批判

(K517,14; S630,16) [問い:] 「それでは、どうして [世尊ブツダによって] 『認識は二つのもの (=眼と色かたちをはじめとする感覚器官とその対象) に依存する』と述べられたのか (=TS 1787cd)」云々と。[この問いに対してシャーンタラクシタは] 「*dvayaṃ pratītya*」云々と答える。

真実を見る方 (=世尊ブツダ) によって、「認識は二つのものに縁って [生起する]」と説かれたが、それは、[認識の] 対象をもつ心のことを暗に意図して教示したものと認められる。(TS 1846)

⁽²¹²⁾ ここで問題となっているブツダによって説かれた教説とは、以下のものを指す。TSP 616,16–19 ad TS 1787–1789 (志賀 [2015: 170,13–171,6]): *atītaṃ ced bhikṣavo rūpaṃ nābhaviṣyan na śrutavān āryasrāvako 'tīte rūpe 'napekṣo 'bhaviṣyat. yasmāt tarhy asty atītaṃ rūpa, tasmāc chrutatvān āryasrāvako 'tīte rūpe 'napekṣo bhavatīti vistaraḥ. tathā: yat kiṃcid rūpaṃ atītaṃ anāgatādi tat sarvaṃ abhisamkṣipya rūpaskandha iti samkhyāṃ gacchatītyādi.* (出典やテキストに関する詳細な情報については、志賀 [2015: 170f.] を参照のこと。) 「というのも、世尊 [ブツダ] によって、『比丘たちよ、もし過去の物質的存在がなかったら、多聞の聖なる弟子は、過去の物質的存在に対する関心を捨てることはなかったであろう。むしろ過去の物質的存在が存在するから [こそ]、多聞の聖なる弟子は、過去の物質的存在に対する関心を捨てる [ことができる] のである』というように詳説されているからである。同様に、『およそ過去の物質的存在や未来等の [物質的存在] 全てを集めた後に、[それらを総称して] <物質的存在の集合 (色蘊)> と名づける』云々と説かれている。」

⁽²¹³⁾ Cf. AKBh 299,1f.: *yat tūktatvād iti, vāyam api brūmo 'sty atītānāgatam iti. atītaṃ tu yad bhūtapūrvam. anāgatam yat satī hetau bhaviṣyati. evaṃ ca kṛtvāstīty ucyate, na tu punar dravyataḥ.* 「しかし、[説一切有部によって] 「[経典に] 説かれているから」と述べられたが、我々も「過去・未来のものは存在する」と述べる。ただし、以前に存在したものが過去のものであり、原因があれば生じるであろうものが未来のものである。そのようにして「[過去・未来のものは] 存在する」と述べられるが、決して実体として [存在すると述べられる] わけではない。」(秋本・本庄 [1978: 91], 小谷・本庄 [2007: 117; 131] も参照のこと。)

⁽²¹⁴⁾ Cf. Schayer [1938: 64]: “That *rūpa* etc. is included under ‘past etc.’, has been said [by the Buddha] in the sense of an imputed (*adhyāropya*), not in the sense of a real distinction of the past and of the future conditions.” また cf. 太田 [1979: 61]: 「「色」等 [の五蘊] が過去等にも存在するというは、その過去と未来の分位を、そのように概念的に設定して説かれているのであって、勝義的に云っているのではない。」

⁽²¹⁵⁾ ここでカマラシーラによって *avasthā* と言い換えられている「*daśā*」とは、説一切有部の主張する (テクニカルな意味での) 過去・現在・未来の「境位」を指すのではなく、諸存在の一般的な「状態」のことを指すと考えられる。(Cf. TS 1816) 作用 (*kāritra*) の有無と共に理論化された三世の「境位」としての *avasthā* は、実在との関係性の議論の中で否定されているからである。(なお、TS 1785, 1786 に現れる *avasthā* も一般的な「状態」を意味する。) よって、ここでの *avasthā* もその方向で訳出した。(Cf. 太田 [1979: 61], 秋本 [2016: 298].)

実に、認識は二種である。認識対象をもつ [認識] と認識対象をもたない [認識] とである。[そのうち] 認識対象をもつ [認識] を暗に意図して、世尊 [ブッダ] は二つのよりどころ (= 感覚器官とその対象) をもつ認識を教示した。

4.4. [1.4.1. 理証 (1)] に対する批判

(K517,19; S630,19) [問い:] 「それでは認識対象をもたなくとも知識が存在するということがいかにして判断されるのか」云々と。[これに対してシャーントラクシタは] 「*nityeśvarādi-*」云々と答える。

実に、恒常なものやイーシュヴァラ (自在神) 等の認識には⁽²¹⁶⁾、全く認識対象が存在しない。[認識対象として考えられる] 言葉・名称等の諸々の存在要素 [もまた]、それら (= イーシュヴァラ等)[に対応する] 形象と結びつくことはないからである⁽²¹⁷⁾。(TS 1847)

[「恒常なものやイーシュヴァラ等」の]「等」という語により、根本物質 (pradhāna)・時間等⁽²¹⁸⁾、他の人々によって構想されたものが⁽²¹⁹⁾把握される。そして、これらの認識は言葉等を対象とすると考えられるべきではない。[従ってシャーントラクシタは] 「*śabdanāmādi-*」云々と述べるのである。それつまりイーシュヴァラ等 [に対応する] 形象とは恒常性やあらゆるものの原因であることという性質等であるが、それらは認識によって [概念として] 想定されている [にすぎず]、言葉や特定の心および色法に相応しない要素 (viprayuktasamkāra, 心不相応行) である名称⁽²²⁰⁾[等の存在要素もまた]、そのような (= 恒常なもの等に対応する恒常性等の) 形

⁽²¹⁶⁾ TSP において例示される *nityatva, sakalahetutva* という形象がそれぞれ「恒常なもの (*nitya*)」「イーシュヴァラ (*īśvara*)」に対応すると考え、上のように訳出した。(Schayer[1938: 64]: “such notions (*buddhi*) as Eternal Being, Almighty God (*īśvara*) etc. ...”) Cf. 秋本 [2016: 299]: 「実に、恒常な自在神等の認識には・・・また、T: *rtag pa'i dbang phyug sogs kyi blo* //

⁽²¹⁷⁾ Cf. 太田 [1979: 61]: 「「常住」とか「神」等の観念に所縁はない。言葉 [や名称] 等の [ある心不相応行] 法は、それに対応する形相をもたないからである。」

⁽²¹⁸⁾ *pradhāna* はサーンキヤ学派、*kāla* はヴァイシェシカ学派がそれぞれその実在を認めたとされる。秋本 [2016: 299, n.138] も参照のこと。

⁽²¹⁹⁾ 校訂テキストの脚注に示した通り、チベット語訳および菅沼 [1964: 100 with n.57] の提案にもとづき、テキストを *paraparikalpitāḥ* と訂正する。なお TSP 166,21 には、*prakṛtīśvarādeḥ paraparikalpitasya ...* という表現も見られる。

⁽²²⁰⁾ <心不相応行>については AK 2.35–36a において、またその一つである <名称の集合 (*nāmākāya*) >については AK 2.47ab において定義されている。

AKBh 62,11–14 ad AK 2.35–36a: *viprayuktās tu samskārāḥ prāptyaprāpti sabhāgatā /*

āsaṃjñīkaṃ samāpattī jīvitam lakṣaṇāni ca // (AK 2.35)

nāmākāyādayaś ceti. (AK 2.36a)

ime samskārā na cittena samprayuktā na ca rūpasvabhāvā iti cittaviprayuktā ucyante.

「[心と] 関わりのない因果的存在 (心不相応行) とは、獲得・保有 (*prāpti*) と、不獲得・不保有 (*aprāpti*) と、[有情間の] 同類性 (*sabhāgatā*) と、無想念 (*āsaṃjñīka*) と、[無想念の精神統一と抑止の精神統一という] 二つの精神統一 (*samāpatti*) と、生命機能 (*jīvita*) と、[生起・存続・老化・無常という四つの] 特徴 (*lakṣaṇa*) と、名辞の集まり (*nāmākāya*) 等である。(AK 2.35–36a) これら因果的存在は、心と相伴うものでもなく、また、それ自体、物で

象と結びつくことはない⁽²²¹⁾。[「言葉・名称等」の]「等」という語によって、他者⁽²²²⁾によって認められる対象の影像等を本質とする相 (nimitta)⁽²²³⁾等 [も把握される]。(TSP ad TS 1847)

(K517,27; S630,25) [問い:] 「その場合、もし対象をもたずとも認識が存在するのであれば、いかにしてそれが『知識』と名付けられるのであろうか。というのもすなわち、『認識する』から [こそ] 『認識』と呼ばれるのである。しかしながら、認識されるべき [対象] が存在しない場合、認識する者にとってどのような認識がありうるのか。」 [この問いに対してシャーンタラクシタは] 「bodhānugatimātreṇa」 [云々] と答える。

また、[ある知は] 自覚 (bodha) を伴うことのみによって「認識 (vijñāna)」と呼ばれる。そして [そのような知は自ら] 輝くことから、それ (=自覚を伴うこと) は、これ (=認識) の < 感覚的なものであること (ajādarūpatva) > [と同一のもの] であると考えられる。(TS 1848)⁽²²⁴⁾

もないから、「心と関わりのない [因果的存在] と呼ばれる。」(櫻部 [1967: 376f.], [1969: 301] も参照のこと。) AKBh 80,13–20 ad AK 2.47ab: nāmakāyādayaḥ saṃjñāvākyākṣarasamuktayaḥ / (AK 2.47ab) ādigrahaṇena padavyañjanakāyagrahaṇam. tatra saṃjñākaraṇam nāma. tad yathā rūpaṃ śabda ity evamādiḥ. ... eṣāṃ ca saṃjñādīnāṃ samuktayo nāmādikāyāḥ. ... tatra nāmakāyas tad yathā rūpaśabdagandharasaspraṣṭavyānīty evamādi. 「< 名辞の集合 > とは、名称と文章と音節との集まりである。「等」という語によって、句の集まり・字の集まりが把握される。そのうち、名辞とは呼称のことである。例えば、『色かたち』『音声』等といったものである。・・・そしてこれらの名称等の集積が、名辞等の集合である。・・・その中で < 名辞の集合 > とは、例えば『色かたち』『音声』『香り』『味』『触覚対象』等といったものである。」(櫻部 [1969: 346f.], 齋藤他 [2011: 183f.] も参照のこと。)

⁽²²¹⁾ Cf. Schayer[1938: 65]: “... and this very aspect, which is ascertained by these notions, is not connected with words, names and other *viprayuktasamskāras*.”

⁽²²²⁾ ここでの「他者」が具体的にどの人物あるいはどの学派を指すかについて確実なことはいえないが、後に続く記述を見る限り、仏教内部の唯識派である可能性が高い。

⁽²²³⁾ ここでの nimitta は、唯識派のテクニカル・タームとして用いられる語であると思われる。『瑜伽師地論』『中辺分別論』『楞伽經』等の唯識派の文献に現れる思想に五事 (五法) 説というものがあるが、五事とは、相 (nimitta)、名 (nāman)、分別 (vikalpa)、真如 (tathatā)、正智 (saṃyagjñāna) の五つの概念から成る。高橋 [2012: 89f.] によると、この五事のうちの < 相 > は < 真如 > と表裏の関係にあり、事物 (vastu) の言語表現 (= < 名 >) の基体または < 分別 > の対象としての側面を表し、< 真如 > は正智の対象で、事物の言語表現し得ない側面を表すという。この唯識派の説に従って、ここでの nimitta も「事物 (vastu) を認識する際に心の中に現れる、言語表現の基体または概念知の対象としての側面」を意味すると理解しておきたい。Cf. Schayer[1938: 65]: “By ‘etc.’ in ‘dharma of words, names etc.’ are meant other determinants (*nimitta*) which may be accepted by our opponents ...”

⁽²²⁴⁾ TS 23 章「外界対象の考察」において、本偈に関連する内容が論じられている。まず認識と「無感覚なもの (ajādarūpa)」「感覚的なもの (ajādarūpa)」の関係については以下のような記述がある。

TS 1999: vijñānaṃ jaḍarūpebhyo vyāvṛttam upajāyate /
iyam evātmasaṃvittir asya yājaḍarūpatā // (= MA 16. また BCAP 190,11, JNA 471,7, TBh 16,15–17 にも引用される。)

「認識は、無感覚なものとは相違したものとして現れる。まさしくこの感覚的なものであることこそが、これ (= 認識) の自己認識である。」(一郷 [1985: 130], 梶山 [1967: 468], Kajiyama[1998: 48] も参照のこと。)

また認識 (自己認識) が「自覚 (bodha)」という性質をもつことについては、以下のような記述がある。

TS 2001: tad asya bodharūpatvād yuktaṃ tāvat svavedanam /
parasya tv artharūpasya tena saṃvedanaṃ katham // (= MA 18)

[さらに対論者が]「自覚を伴うこともまた、知られるべき[対象]なしにはありえないのではないか」というならば、[シャーンタラクシタは]「**sā ca**」[云々]と答える。「それ」とは「自覚を伴うこと」である。「これ」とは、「認識の」ということである。[問:] [自覚を伴うことは]どのようなものであると述べられるのか。[答:] <感覚的なものであること> [と言い換えられる]。[さらに、認識自体とは]別の、輝かせられるべきもの (prakāśyavastvantara) は存在しないから、また [認識自体とは]別の輝き (prakāśāntara) はないから、ちょうど空中に存在する光のように、[認識は]輝くこと (prakāśa) を性質とする。それ故、[認識は]「自覚を性質とする⁽²²⁵⁾」と述べられる。(TSP ad TS 1848)

4.5. [1.4.3. 理証 (2)] に対する批判

(K518,9; S631,13) [問い:] 「また、過去の業はいかにして果報をもたらすのか (≡ TS 1788ab)」というこの [問い] に対して、[シャーンタラクシタは] 「**vipākahetuḥ**」云々と答える。

過去の異熟因 (vipākahetu)⁽²²⁶⁾が [直接的に] 果報をもたらすことは承認されない。しかしながら、それ (=過去の異熟因) によって潜在印象を残された認識の相続 (prabandha) から [生じる] 果報は認められる。(TS 1849)

「[過去の異熟因によって] 潜在印象を残された [認識]」は、相続されて [間接的に] 果報を生み出す能力をもつものとして生み出される⁽²²⁷⁾。(TSP ad TS 1849)

(K518,13; S631,15) [問い:] 「もしそのようであるとすれば、どうして世尊 [ブッダ] によって

『尽きてしまい、消滅し、変異した業は、[それでも] 存在する』

と述べられたのか」というので、[シャーンタラクシタは] 「**tām eva**」云々と答える。

[世尊ブッダは] 心の相続 (saṃtati) におけるまさしくその潜在印象 (vāsanā) に関連して、「[過去の] 業は存在する」と比喩的に説かれた。ちょうど [あるものの] 原料 (mūla) が [実際は消滅しているにもかかわらず] 「消滅していない」 [と言われるの] と同様に。(TS 1850)

「それ故、これ (=知) は、自覚を性質としているから [その限りにおいて] 自己を認識することは妥当である。しかしながら、他のものである対象の性質がそれ (=知) によって、いかにして認識されるだろうか。」(一郷 [1985: 131] も参照のこと。)

⁽²²⁵⁾ Cf. TS 2001a: tad asya bodharūpatvāt.

⁽²²⁶⁾ <異熟因>については、AKBh 89,15–17 ad AK 2.54cd および櫻部 [1967: 390f.], [1969: 371–374] を参照のこと。

⁽²²⁷⁾ Cf. 秋本 [2016: 300]: 「薫じられた」とは、「連続して結果を生む能力をもって [各瞬間に] 生じた」という意味である。」

「**比喩的に (bhaktyā)**」とは、転義的に (upacāreṇa) ということである。ちょうど、[金鉱石等、金等の] 原材料 (mūladravya) から生じた金等の結果の相続が存在する場合、[金鉱石等の] 原材料が [実際には] 消滅しているとしても、[金等としては存在し続けているため、比喩的に] 「消滅していない」と述べられるのと同様に、業もまた [実際には消滅しているとしても比喩的に消滅していないと述べられるのである]。(TSP ad TS 1850)

(K518,19; S631,19) [問い:] 「転義的に説示する目的は何か」というので、[シャーンタラクシタは] 「**ucchedadr̥ṣṭi-**」[云々]と答える。

また [かの] 教師 (=世尊ブツダ) がそのように (=「過去の業は存在する」と) 明示されたのは、断見の消滅のためである。さもなければ (=過去の業がそれ自体として実在するなら)、『**勝義空性経 ([Paramārtha-]śūnyatāsūtra)**』における教説はいかにして通積される (nīyate) のであろうか。(TS 1851)

もし [世尊ブツダによって] 「過去の業は存在しない」と述べられたなら、[人々は] 過去の業によって [心身の相続の中に] 植え付けられ [相続されて] 間接的に果報を生み出す [ようになる] 能力もまた存在しないと理解してしまうであろう⁽²²⁸⁾。その場合、教え導かれるべき者たち (vineya) は断見に陥るであろう⁽²²⁹⁾。従って、世尊 [ブツダ] は「業は存在する」と説いたのである。というのも、さもなければ、すなわちもし過去のものがそれ自体として [実際に] 存在するとすれば⁽²³⁰⁾、『**勝義空性経**』における教説はいかにして通積されるのであろうか [、いや通積されえない、ということになる] からである。[その教説とは]

「眼は生起するときどこから来るわけでもなく、滅するときどこかに集まることもない。従って、眼は今まで存在しなかったが今存在し、存在し終わって消滅する (prativigacchati)」

というものである。

[反論:] 「もし現在世において、[眼は] かつて存在しなかったが今存在するのである」というならば、[答論:] そのようなことはない。[現在] 世は、[眼という] 存在と異なるものではないからである。なぜなら [AK においても]

「それら (=諸々の因果的存在) は、すなわち [三] 世であり言葉のよりどころ (kathāvastu)

⁽²²⁸⁾ Cf. Schayer[1938: 67]: “... then people might believe that the potency of producing effects indirectly (paramāryeṇa phalotpādanasāmārya) which has been created by the past karma [and which as a vāsanā permeates the whole saṃtāna] does not exist either.”

⁽²²⁹⁾ Cf. 秋本 [2016: 301]: 「所化 [の有情] は、過去の行為によって連続してもたらされる<結果を生じる能力>さえも存在すると理解する断見に陥るであろうことから、・・・」

⁽²³⁰⁾ ここまでの記述に関して、AKBh との関連箇所 (AKBh 299,10f.) の訳については秋本・本庄 [1978: 92]、小谷・本庄 [2007: 118; 133] を、また AKBh† との関連箇所については秋本 [1996: 106] を参照のこと。

である。(AK 1.7c)」

と述べられているからである。[反論:] あるいはもし「[眼は、現在時においてではなく眼] それ自体において⁽²³¹⁾かつて存在せず、今存在する」[という]ならば⁽²³²⁾、[答論:] その場合、[眼自体がかつて存在せず、今存在するということになるため⁽²³³⁾]「未来の眼は存在しない」ということが成立する⁽²³⁴⁾。さらにまた諸々の因果的存在が常に存続している場合、[それらには]原因も結果も存在しないので、<苦という真理(苦諦)>と<[苦の]原因という真理(集諦)>は存在せず、それら(=苦諦・集諦)が存在しないことから<[苦の]抑止[という真理](滅諦)><[苦の抑止に至るための]道[という真理](道諦)>もまた[存在しないことになる]。それ故また、四つの真理が存在しないことから、[苦を]知り尽くすこと(parijñā)・[苦の原因を]断ち切ること(prahāṇa)・[苦の抑止を]現証すること(sākṣātkriyā)・[苦の抑止に至るための道]を]修習すること(bhāvanā)も妥当なものではない[ことになる]。またそれら(=知り尽くすこと等)が存在しないことから、[預流果等の]果報に住する[聖]者たちも、[それらの果報に]向かう聖者たち(pudgala)⁽²³⁵⁾も存在しない[ことになる]。その場合、あらゆる[世尊ブツダ]の教え(pravacana)が[相互に]齟齬をきたすことになるので、過去のもの等の実在の集まり(vastujāta)⁽²³⁶⁾を想定することは正しくない⁽²³⁷⁾。⁽²³⁸⁾ (TSP ad TS 1851)

⁽²³¹⁾ AKVy 474,9: svātmani cakṣuṣi cakṣur abhūtā bhavati ...

⁽²³²⁾ この反論は以下の議論を前提にしていると思われる。

AKVy 474,6f: ya eva vartamāno 'dhvā, sa eva bhāvaḥ. tat kathaṃ sa eva vartamānaḥ svātmany adhvaṇy abhūtā bhaviṣyati. 「現在世そのものが存在である。その場合、いかにしてまさにその同じ現在のものが、それ自身の時(=現在世)において、かつて存在せずこれから存在するということがあるか。」

⁽²³³⁾ AKBhT D142b6f.; P279bf.; 秋本 [1996: 114,1-3]: gal te rang gi bdag nyid la ma byung ba las byung na ni de ltar na mig ma byung ba las byung ngo zhes bya bar 'gyur la /より、このように補足する。

⁽²³⁴⁾ Cf. Schayer[1938: 68]: “This [interpretation] is obviously nothing short of an acknowledgement that [just as we are teaching] the past eye does not exist.”

⁽²³⁵⁾ ここでは、四向四果(預流果に向かう者と住する者、一來果に向かう者と住する者、不還果に向かう者と住する者、阿羅漢果に向かう者と住する者)の八種の聖者のことが意図されている。以下の AKBh の記述も参考のこと。AKBh 366,1-3: ta ete sarva evāstāv āryapudgalā bhavanti. pratipannakāś catvāraś ca phale sthītāḥ. tadyathā srotaāpattiphalasākṣātkriyāyai pratipannakah srotaāpannaḥ. evaṃ yāvad arhattvaphalasākṣātkriyāyai pratipannako 'rhanṇaṇi. 「彼ら(=有学と無学)はすなわち全てで八[種]の聖者である。[果報に]向かう者[四種]と果報に住する者四[種]とである。すなわち、預流果を現証するために向かう者と預流[果に住する者]と、同様に、乃至、阿羅漢性という果報を現証するために向かう者と阿羅漢[果に住する者]と、である。」

⁽²³⁶⁾ Cf. TBh 34,15f.: sametya sambhūya hetupratyayaiḥ kṛtaṃ vastujātaṃ saṃskṛtaṃ. 「因果的存在とは、原因や条件が集まり合わさることによって作られた、実在の集まりのことである。」

⁽²³⁷⁾ Cf. 秋本 [2016: 302]: 「よって、すべての[仏]説は消失する[ことになる]から過去等のものの類を[実在として]構想することは正しくない。」また cf. Schayer[1938: 68]: “Therefore we state: the conception of real thing which is past etc. does not possess any objective correlate (=nātūdivastujātakalpanā sādhvī).”

⁽²³⁸⁾ AKBhTにおける並行箇所 (AKBhT D143a3-5; P279b7f.; 秋本 [1996: 114,14-20]) の訳等については、秋本 [1996: 108] を参照のこと。

4.6. [1.4.4. 理証 (3)] に対する批判とヨーガ行者と如来の認識および教説のちがひ

(K519,6; S632,16) [問い:] 「ヨーガ行者たちにとって、過去および未来のものに対する知識はいかにして区別されているのか⁽²³⁹⁾(≡ TS 1788)」というこの [問い] に対して、[シャーンタラクシタは] 「**pāramparyeṇa**」云々と答える。

ヨーガ行者たちは、間接的あるいは直接的に [過去の原因の] 結果・[未来の結果の] 原因となる現在のものの様相を認識する。(TS 1852)

そしてその後、[ヨーガ行者たちは] 真実としては [独自相としての] 対象をもたないとしても、概念知を伴うことを本質とする諸々の清浄な世間的認識⁽²⁴⁰⁾によって [その様相] を追認する⁽²⁴¹⁾。(TS 1853)

それ故、まさしくすでに起こった、またこれから起こるであろう原因と結果の相続に依拠して、[ヨーガ行者たちの、] 過去と未来のものについての諸々の教説は表出されるのである (pravartante)。(TS 1854)⁽²⁴²⁾

⁽²³⁹⁾ Cf. 秋本 [2016: 302]: 「[過去・未来のものがなければ、これは] 過去・[これは] 未来と判別された認識がどうして瑜伽行者たちにあるのか・・・」

⁽²⁴⁰⁾ アサンガ著『撰大乘論』第8章では、「後得清浄世間智」は有分別ではあるものの、分類としては三種の無分別智(修行による無分別智・根本無分別智・後得智)の一つとして数えられているようである。長尾 [1987: 278–281]、志賀 [2015: 166 with n. 76–78] も参照のこと。

⁽²⁴¹⁾ Cf. Schayer [1938: 69]: “And thereupon they associate it with conscious moments which, although belonging to the empirical sphere, are nevertheless purified; in their true essence they are objectless but, nevertheless, they are connected with conceptual hypostases (*vikalpa*)” また cf. 太田 [1979: 62]: 「実は外界対象を持たないにも拘らず、観にもとづく「後得清浄世間智」によって、彼らは [過去や未来の対象を] 追うのである。」

⁽²⁴²⁾ 校訂テキストの脚注でも示した通り、TS 1852–1854 は、TSP 1090,12–17 ad TS 3472 (第26章「超感覚的な対象を見る方の考察 (Atīndriyārthadarśiparīkṣā)) において引用されている。シャーンタラクシタ・カマラシーラは両者とも、この箇所に対して参照を促している。なお、TS 3472 とそれに対する注釈は以下のような内容となっている。特に TSP の記述は、TS 1852–1854 をパラフレーズした内容となっているため、この箇所の注釈としても利用可能である。

TS 3472: *anāgate ca vijñeṇe pratyakṣasya tathā bhavet / sāmānyam yoginām uktaṃ tat traikālyaparīkṣaṇe //*

「また、未来のものが認識対象である場合、ヨーガ行者たちの直接知覚にはそのような能力があるはずである。そのことは、[すでに本書の] 「三時の考察 [章]」において述べられている。」

TSP 1090,6–11: **tat traikālyaparīkṣaṇa** iti. tatra hy evam **uktaṃ**: sarva eva hi bhāvāḥ sāksāt pāramparyeṇa vā kāryakāraṇatām gatāḥ, atra [tatra K] vartamānam eva vastv atītasya sāksāt pāramaparyeṇa vā kāryabhūtam, anāgatasya tu kāraṇabhūtam. pratyakṣeṇa yathāvat sarvākāram anubhavantas tatpr̥thalabdhaiḥ śuddhalaukikaiḥ paramārthato nirviṣayair vastupratibandhād avisampvādbhir vikalpair hetuphalabhūtam atītām anāgatām ca bhāvasantatim ālambyātītānāgatam vastu vyavasthāpanti yogina iti. 「『そのことは、[すでに本書の] 「三時の考察 [章]」において [述べられている]』について。実に、そこ (=三時の考察章) において以下のように述べられている。まさしくあらゆる事象は、直接的あるいは間接的に [現在のものの] 結果あるいは原因となっている。このうち、まさに現在の事物は、直接的あるいは間接的に過去のものの結果であり、未来のもの原因となる。[無分別智としての] 直接知覚によって、あるがままに、[あらゆる事象の] あらゆる形象を直接経験するヨーガ行者たちは、それ (=無分別智としての直接知覚) の後に得られる清浄で世間的な諸々 [の概念知]、[すなわち] 勝義としては [独自相としての] 対象をもたない [ものの]、[過去・未来の] 事物との [間接的な] 結合関係にもとづいて整

あらゆる概念知の網を離れた知識の相続をもつ如来の諸々の教説は、全く[如来自身の]意識的努力なしに(無功用に, *anābhogena*) 表出される。(TS 1855)

[以上が, TS 第 21 章]「三時の考察」である。

[TS 1852b の「結果・原因となる」とは] 過去の対象に関していえば, [現在のものの様相はその] 結果となり, 未来の[対象]に関していえば [現在のものの様相はその] 原因となるということである。「概念知を伴うことを本質とする諸々[の清浄な世間的認識]によって」とは, 「概念知を有する諸々[の清浄な世間的認識]によって」という意味である。「真実としては[独自相としての] 対象をもたない諸々[の清浄な世間的認識]によって」というのは, 「言語表現 (*abhilāpa*) を伴う諸々の知識によって」[ということである]。[それらの知が対象をもたず, 言語表現を伴っていると言われるのは] 独自相を対象としていないからである⁽²⁴³⁾。[TS 1854a の]「*tat*」とは, *tasmāt*(それ故)[の意味]である。未だ完全に清浄ではないヨーガ行者たちの過去等についての諸々の教説は, すでに起こった, またこれから起こるであろう原因と結果の相続に依拠して, 表出されるのである。一方, 世尊[ブツダ]すなわち如来にとっては, [そのような] 清浄な世間的知識すら存在しない⁽²⁴⁴⁾。あらゆる無明を断ち切ることによって, 常に精神集中した状態(三昧)にあるからである。また, 概念知は無明 (*avidyā*) を本質とするものであるからである。[このことは] 以下のように述べられる。

「このような概念知は, まさにそれ自身として無明を性質としている。なぜなら, [概念知は知] 自身の形象を外界 [対象] であると付託した後に生じるからである」⁽²⁴⁵⁾

合性をもつ諸々の概念知により, [現在のものと] 因果関係にある過去および未来の事象の相続を認識対象として, 過去と未来の事象を定立するのである。」

上記の箇所については, TS 1852–1855 の内容を含め, 川崎 [1992: 254f.], [1984: 318f.] において解説されている。

⁽²⁴³⁾ チベット語訳では, 「*vikalpānugātāmabhiḥ* (TS 1853b)」に対する注釈と「*tattvato`viṣayair* (TS 1853d)」に対する注釈の順序が原文とは逆になっている。

⁽²⁴⁴⁾ TS 3475 によると, 過去・未来の事象自体は独自相をもたないものの, 一切智者の無分別智は一種の自己認識であるため, 独自相を対象とする, すなわち対象をもつとされる。

TS 3474: *svātmāvabhāsaṣaṃvittes tat svalakṣaṇagocaram / spaṣṭāvabhāsaṣaṃvedāt tac ca pratyakṣam iṣyate //*

「[知] 自身の顕現を認識するため, それ (=一切智者の知) は独自相をその対象領域とする。明瞭に顕現する [知] を認識することから, それはまた<直接知覚>であると認められる。」

⁽²⁴⁵⁾ 校訂テキストの脚注にも示した通り, この偈の全体あるいは一部はいくつかの論書に引用されるものの, 出典は未比定である。なお, *Laṅkāvatārasūtra* に内容的に関連する記述が見られる。

LA 6.2 (=91,14f.) (cf. LA 10.708 [=154,1f.]): *bimbavad dṛśyate cittam anādimatibhāvitam / arthākāro na cārtho`sti yathābhūtaṃ vipaśyataḥ //* (MAV 124,14–17 ad MA 45 にも引用される。)

「無始以来の考えがしみついている心は, 影像のように, 対象の形象をもつと見られている。しかしながら, 如実に観察する人にとっては, 対象は存在しない。」(一郷 [1985: 145] も参照のこと。)

LA 10.153cd–154ab (=117,19f.): *bāhyārthadarśanaṃ mithyā nāsty arthaṃ cittam eva tu / yuktyā vipaśyamānānām grāhagrāhyaṃ nirudhyate //* (MAV 126,5–8 ad MA 45 にも引用される。)

『「外界対象を見ること」は誤りである。対象は存在せず, 心のみが[存在する]。論理によって観察している人々

と。[如来自身の] 過去の誓願 (praṇidhāna) や福德 (puṇya) および智 [慧](jñāna) の資糧 (sambhāra) の力によって獲得された、如意宝珠 (cintāmaṇi) に似た身体 (ātmabhāva) をもつ そのお方 (=如来) の諸々の教説は、全く [如来自身の] 意識的努力なしに表出される。(TSP ad TS 1852–1855) 以上が [TSP 第 21 章] 「三時の考察」[章] である。

にとつて、所取・能取は否定される。」(一郷 [1985: 145] も参照のこと。)

LA 10.489 (=139,19f.): bahirdhā nāsti vai rūpaṃ svacittaṃ dṛśyate bahiḥ /
anavabodhāt svacittasya bālāḥ kalpenti saṃskṛtam // (偈前半は、MAV 292,22f. ad MA 91 にも引用される。)

「外界に色かたちが存在するのでは決してない。[認識者] 自身の心が外界のものとして見られるのである。愚かな者たちは、[このことを] 了知しないことから、自身の心について作り出されたものを構想するのである。」(一郷 [1985: 183] も参照のこと。)

また偈の後半と内容的に類似する記述が PVin および TS にも見られる。

PVin 2 46,7: svapratibhāse 'narthe 'rthādhyavasāyena pravartanād ... 「[推理知は、外界] 対象ではない [知] 自身の顕現を [外界] 対象であると思いつくことによって発動するので・・・」

TS 1065cd: svollekhaṃ bāhyarūpeṇa śabdadhīr adhyavasyati //

「言語知は、[知] 自身の形象を外界 [対象] であると思いつく [ことによって生じる]。」(Cf. PVSVT 112,11–14.) 現段階では推測に過ぎないが、上に挙げた LA の一連の偈のうち複数の偈が MA や MAV にも引用されていること、また引用されている偈の後半と内容的にほぼ一致する記述が TS 1065 にも見られること、*Bodhicaryāvatāra-pañjikā* や *Munimatālaṃkāra* といった比較的後代の著作にこの偈の一部または全体が引用されていること等から、この偈が経典等から引用されたものではなく、シャーントラクシタがその作者である可能性も考えられる。

参考文献と略号 (追加分)

(1) 一次文献・略号

- JNA *Jñānaśrīmitranibandhāvali* (Jñānaśrīmitra): A. Thakur (ed.), *Jñānaśrīmitranibandhāvali (Buddhist Philosophical Works of Jñānaśrīmitra)*, Patna 1987.
- TBh *Tarkabhāṣā* (Mokṣākaragupta): H. R. Rangaswami Iyengar (ed.), *Tarkabhāṣā and Vādashāna of Mokṣākaragupta and Jitāripāda*, Mysore 1952.
- NP *Nyāyapraveśa* (Śāṅkarasvāmin): M. Jambuvijaya (ed.), *Nyāyapraveśakaśāstra of Bauddh Ācārya Diinnāga (The father of the Buddhist Logic). With the commentary of Ācārya Haribhadrasūri and with the subcommentary of Pārśvadevagaṇi*, Delhi 2009.
- PV 1 *Pramāṇavārttika*, chapter 1 (Dharmakīrti): see PVSV.
- PVSV *Pramāṇavārttikavṛtti* (Dharmakīrti): R. Gnoli (ed.), *The Pramāṇavārttikam of Dharmakīrti. The First Chapter with the Auto-commentary*, Roma 1960.
- PVin 2 *Pramāṇaviniścaya*, chapter 2 (Dharmakīrti): E. Steinkellner (ed.), *Dharmakīrti's Pramāṇaviniścaya. Chapter 1 and 2*, Beijing–Vienna 2007.
- BCAP *Bodhicaryāvatārapañjikā* (Prajñākaramati): P. L. Vaidya (ed.), *Bodhicaryāvatāra of Śāntideva with the Commentary Pañjikā of Prajñākaramati*, Darbhanga 1960.
- MA *Madhyamakālaṅkāra* (Śāntarakṣita): M. Ichigo (ed.), *Madhyamakālaṅkāra of Śāntarakṣita with his own commentary or Vṛtti and with the subcommentary or Pañjikā of Kamalaśīla*, Kyoto 1985.
- MAV *Madhyamakālaṅkāravṛtti* (Śāntarakṣita): see MA.
- MMA *Munimatālaṅkāra* (Abhayākaragupta): see 磯田 [1985], [1988], 李 [2012].
- YS *Yogasūtra* (Patañjali): see YBh (志賀 [2015b: 204]).
- LA *Saddharmalaṅkāvatārasūtra*: B. Nanjo (ed.), *The Laṅkāvatāra Sūtra*, Kyoto 1923.
- VN *Vādanyāya* (Dharmakīrti): M. T. Much (ed.), *Dharmakīrtis Vādanyāya, Teil I, Sanskrit-Text*, Wien 1991.

- HB *Hetubindu* (Dharmakīrti): E. Steinkellner (ed.), *Dharmakīrti's Hetubinduḥ, Teil I Tibetischer Text und rekonstruierter Sanskrit-Text*, Wien 1967.
- HBT *Hetubinduṭīkā* (Arcaṭa): S. Sanghavi and Jinavijayaji (ed.), *Hetubinduṭīkā of Bhaṭṭa Arcaṭa with Sub-Commentary Entitled Āloka of Durveka Miśra*, Baroda 1949.
- A 秋本勝氏による TS および TSP 第 21 章の校訂テキスト (=秋本 [2016: 305–334])
- (2) 二次文献
- 秋本 [2016] 秋本勝, 『仏教実在論の研究 —三世実有説論争— (上)』, 東京 2016.
- 磯田 [1988] 磯田熙文, 「Abhyākaragupta 『Munimatālaṃkāra・(Text)(I)』, 『東北大学文学部研究年報』 34, 251–320.
- 磯田 [1988] 磯田熙文, 「Abhyākaragupta 『Munimatālaṃkāra・(Text)(Ī)』, 『東北大学文学部研究年報』 37, 138–176.
- 一郷 [1985] 一郷正道, 『中観莊嚴論の研究 —シャーントラクシタの思想—』, 京都 1985.
- 稲見 [2012] 稲見正浩, 「第二章 存在論—存在と因果」, 桂紹隆・斎藤明・下田正弘・末木文美士 [編], 『シリーズ大乘仏教 第九巻 認識論と論理学』, 東京 2012, 3–49–90.
- 上村・宮元 [1994] 上村勝彦・宮元啓一 [編], 『インドの夢・インドの愛: サンスクリット・アンソロジー』, 東京 1994.
- 江崎 [2004] 江崎公児, 「ダルマキールティによる差異の定義について —‘viruddhadharmādhyāsa’ とは何か—」, 『比較論理学研究』 2, 39–46.
- 桂 [2012] 桂紹隆, 「第一章 仏教論理学の構造とその意義」, 桂紹隆・斎藤明・下田正弘・末木文美士 [編], 『シリーズ大乘仏教 第九巻 認識論と論理学』, 東京 2012, 3–48.
- 川崎 [1984] 川崎信定, 「VII 一切知者の存在論証」, 平川彰・梶山雄一・高崎直道 [編], 『講座・大乘仏教 9 認識論と論理学』, 東京 1984, 293–339.

- 川崎 [1992] 川崎信定, 『一切智思想の研究』, 東京 1992.
- 斎藤他 [2011] 斎藤明・高橋晃一・堀内俊郎・松田訓典・一色大悟・岸清香 [編], 『『俱舍論』を中心とした五位七十五法の定義的用例集—仏教用語の用例集 (パウツダコーシャ) および現代基準訳語集 1—』, 東京 2011.
- 櫻部・小谷 [1999] 櫻部建・小谷信千代, 『俱舍論の原典解明 賢聖品』, 京都 1999.
- 志賀 [2015a] 志賀浄邦, 「仏教における存在と時間: 三世実有論をめぐる諸問題を再考する」, 『インド哲学仏教学研究』22 (特別号 インド哲学諸派の〈存在〉をめぐる議論の解明), 2015, 151–174
- 志賀 [2015b] 志賀浄邦, 「*Tattvasaṃgraha* および *Tattvasaṃgrahapañjikā* 第21章「三時の考察 (Traikālyaparīkṣā)」校訂テキストと和訳 (kk. 1785–1808)」, 『インド学チベット学研究』19, 158–209.
- 高橋 [2005] 高橋晃一, 『『菩薩地』『真実義品』から「撰決撰分中菩薩地」への展開—*vastu* 概念を中心として』, 東京 2005.
- 本庄 [2014] 本庄良文, 『『俱舍論註ウパーイカーの研究 訳注篇』』上・下, 京都 2014.
- 御牧 [1984] 御牧克己, 「刹那滅論証」, 『講座大乘仏教』9, 東京 1984, 217–254.
- 李 [2012] 「梵文『牟尼意趣莊嚴』*Munimatālaṃkāra* の梵文写本について」, 『密教文化』229, 2012, (25)–(35).
- Kajiyama[1998] Y. Kajiyama, *An Introduction to Buddhist Philosophy: An Annotated Translation of the Tarkabhāṣā of Mokṣākaragupta. Reprint with Corrections in the Author's Hand*, Wien 1998.

A Critical Edition and an Annotated Japanese Translation of the 21st Chapter (*Traikālyaparīkṣā*) of the *Tattvasaṃgraha* and *Tattvasaṃgrahapañjikā* thereon (kk. 1809–1855)

Summary

This article is a critical edition and an annotated Japanese translation of the latter half (kk. 1809–1855) of the 21st chapter (*Traikālyaparīkṣā*) of the *Tattvasaṃgraha* (TS) by Śāntarakṣita and *Tattvasaṃgrahapañjikā* (TSP) by Kamalaśīla, which follows my previous paper (Shiga[2015b]). The portion that I edit and translate here contains the following subjects: (1) the theory of activity (*kāritra*) claimed by Saṃghabhadra and the criticism against it (TS 1809–1819), (2) the relation-

ship between things of the past and future and their capabilities for purposeful action/causal efficacy (*arthakriyā*) (TS 1820–1841), and (3) the refutations against the five grounds of the *sarvāstivāda* presented by the Sarvāstivādins (TS 1842–1855).

In subject (1), Śāntarakṣita and Kamalaśīla discuss the relationship between the definition of *kāritra* given by Saṃghabhadra—“the capacity to draw an effect (*phalākṣepaśakti*)”—and a real entity. Although they once negate the *kāritra* because it is a conventional existence (*sāmvṛta*) or provisional entity (*prajñaptisat*), they come to consider *kāritra* (= *phalākṣepaśakti*) to be a real entity (*vastu*) or a particular (*svalakṣaṇa*) from TS 1809 onward, and they deny that things of the past or future have such capacities. They refute the assertion of the Sarvāstivādins, because it is impossible for plural contradictory properties to belong to a single entity.

In subject (2), the authors mainly examine whether things of the past and future are momentary, and whether those things have *arthakriyāśaktis*. If they are momentary, it follows that things being at a certain past or future period would have indefinite plural time periods. If they are not momentary, on the other hand, it would result in a contradiction with the theory of *kṣaṇabhāṅga*. From TS 1834, the authors examine whether past and future existences have *arthakriyāśaktis*. It should be noted here that they formulate the proofs by *reductio ad absurdum* (*prasaṅga*) and its contraposition (*prasaṅgaviparyaya*) to lead the Sarvāstivādins to the undesirable consequence that past and future existences would be present ones.

In subject (3), the authors individually criticize the five grounds for the *sarvāstivāda* presented in TS 1787–1789. We should notice here that the authors discuss whether past and future entities can be established as real ones by the existence of yogic cognition, and that they advance their original views in this portion (TS 1852–1855). They do not directly negate the existence of yogic cognition that comprehends past and future entities; rather, they partly accept it and try to search for another solution different from that of the Sarvāstivādins. The statements regarding yogic cognition are mentioned and examined again in the last chapter of the TS and TSP (Atīndriyārthadarśiparīkṣā). It is noteworthy that Śāntarakṣita and Kamalaśīla make a clear distinction between yogic cognition (= *śuddhalaukikavijñāna* or *vikalpa*) and the Tathāgata’s cognition (= *samastakalpanājālarahitajñāna* or *nirvikalpajñāna*).

<キーワード> 三世実有論, 説一切有部, サンガバドラ, 作用, シャーントラクシタ, カマラシーラ, ダルマキールティ, 効果的作用能力, 刹那滅論証, 『勝義空性経』, ヨーガ行者の認識